

第四章 軍靴の音高まる果てに

——開戦前後から敗戦まで

1 ニヒリズム

「われわれが商売での学生生活を送った昭和十二年からの二、三年と、昭和四十年代の後半とでは、若ものたちのニヒリズムという点で奇妙な相似性がある。われわれの時代にも、『窓を開ければ……』ではじまった、渋谷のり子のうたうところの『別れのブルース』や、『古き花園には……』といった、ペーソスと退廃のこもった暗い歌がはやったが、いまの若い人たちの心をとらえている歌も、藤圭子の演歌『新宿ブルース』に代表されるような、デスベレートなものが多い。」ヤング向け雑誌のジャーナリストという、高商出としてはかなり変わりダネの分野で活躍している十四回生のS・Bは、このように語っている。物質的には戦前と比較にならぬほど豊かになりながら、社会はますます高度に組織された管理社会となり、そのなかの歯車化することに生きる喜びを見いだし得ないむなしさ。しかも、それはひとり資本主義世界だけのことでなく、かつて戦前からの若ものたちが、弾圧にもめげず理想の社会としてあこがれた社会主義体制も、あいっぴだ東欧動乱、チェコ事変、ソ連邦における反体制知識人の問題などが起こり、また、中ソ対立がますます激化して、人類の理想とはほど遠い現実

が明らかになった幻滅。こうして一九六〇年代の末期に、世界中に吹き荒れたスチューデント・パワーの一翼になって、東大でも、後述するように横浜国大でも、またその他各地の大学で、学生たちは既成の管理機構に徹底抗戦を試みてはみたが、結果は何ともかわらず、挫折感のみが残った。そして、シラけて、ニヒって、ズッコケて、が新しい大学ファッションとなったとされる現代。

「戦争と死」という超えることのできない大きなカベに行く手をふさがれて、つかの間におわるかもしれない生のニヒルにひたさるをえなかった準戦時体制下の学生生活と、以上のような現代学生かたぎとのあいだには、もちろん、質的に大きなへだたりがあろう。たえず「死の影」におびえねばならなかった昔の若ものたちにくらべて、生きようと思えばどうにでも生きられる現代若もの絶望は、あるいは、ぜいたくに映るかもしれない。しかし半面、昔の若ものには、つかの間の生でおわたたにしても、生きるための価値、あるいは帰依する何ものかを選ぶことのできる可能性は大きく残されていた。よしんば、それがイデオロギーであれ、祖国であつたにしても。しかし、国家権力が洋の東西を問わず、人間神外的な管理機構の集中的表現となり、イデオロギーの終焉がいわれる現代では、若ものたちにはもはや、帰依すべき何ものも残されてはいない。生きるだけなら何とでも生きられようが、どうしようもないやりきれなさ——そういう現代のニヒルは、あるいはより深い絶望であるのかもしれない。

だが戦前の若ものたちには、開戦とともに、やがて「死」との対決がぬぎさしならぬものとなったとき「祖国防衛」への帰依に自らを駆り立てていった自分自身への、言いようもない不憫さといきどおろしさが、いまに残されている。高商の三年間を徹底して文学書と哲学書をむさぼり読んだという、十四回生の前国大経済学部長O・Hは、つぎのように記している。

「入学直後、思想とか、社会とかに眼をひらいて勉強しようとしたとき、ぼくらの周囲にあった知的刺激は、労働派をも含めたマルクス主義が一掃されたあとに残されていた自由主義者たちの啓蒙主義、教養主義、学問のための学問、芸術至上主義の主張、政治的無関心、ニヒリズムの風潮だったといえる。(中略)ひたむきな模索の末、河合栄治郎氏から、最後には西田哲学へ行ったが、(中略)しかし、この哲学は、結局は、青年学徒に対して祖国のために死ぬこと、祖国と一体化することが、人間最高の生き方であることを教えたと思う。(中略)ぼくはそのため、心臓疾患をかくしてまで一兵卒の道を選んで兵隊に行った。」(『富丘会報』第二十四号、大崎平八郎「ぼくの学生時代」から)

昭和十三年六月学校当局の図書課によって実施された、学生の読書調査の結果では、愛読書の上位に、阿部次郎の『三太郎の日記』、倉田百三の『出家とその弟子』『愛と醜態との出発』、河合栄治郎の『学生と生活』など一連の学生教養叢書、小説ではパウル・バク『大地』、島木健作『生活の探求』、石坂洋次郎『若い人』などがあげられている(『高商学報』第九十二号、昭和十三年十月二十九日発行)。さらにそのころ学生によく読まれたのは『善の研究』など西田哲学の書物、出陣『哲学以前』、文学では夏目漱石、芥川竜之介、武者小路実篤、志賀直哉のもの、当時の新進では前記の読書調査に出ているもののほか、阿部知二『冬の宿』、石川達三『蒼氓』『結婚の生態』など、外国文学ではトルストイ、ドストエフスキー、ツルゲーネフ、ゲーテ、ジイド、ヘルマン・ヘッセなどのものであった。

そこにみられるものは、大正デモクラシー期の文化の色濃い残照である。「阿部次郎の『三太郎の日記』(一九一四〜一五)に代表されるような、個人の人格や生活態度の洗練に心を傾ける教養主義の思想、その基礎にあるドイツ新カント派の理想主義哲学、上流階級の子弟があつまった白樺派の人道主義やコスモポリタニズムは、そ



街を行く

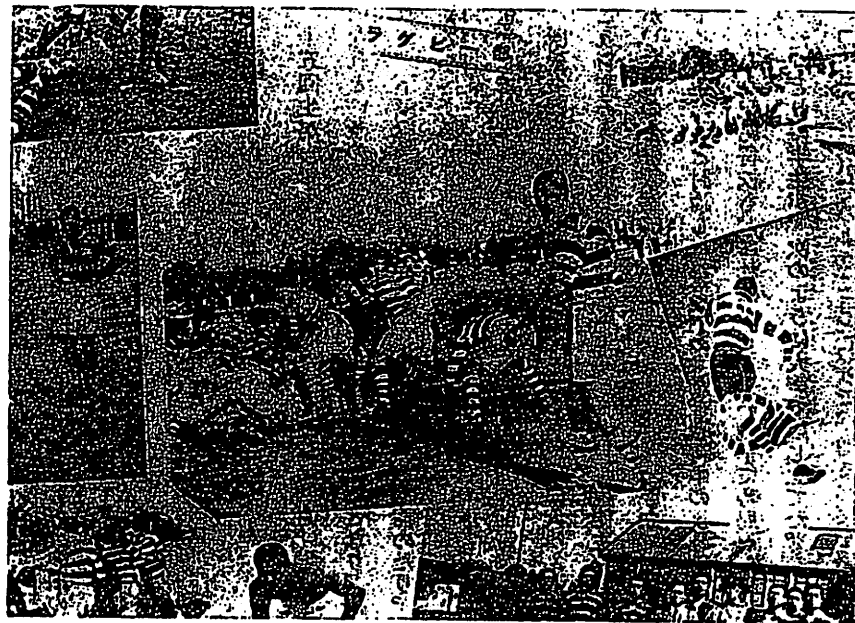
のだった。真金町は、伊勢佐木町裏の曙町通りからさらに入った、別名『親不孝通り』と総称された歓楽街の一角である。そうしたいわくつきの小座ブトンをいつも見せつけられて、童貞組は「すごいなあ、あいつは真金町から学校へ通っているんだそうだ」と、一種羨望のまなざしを向けたものである。

富士見寮に入っていた十四回生の某君は、夜な夜なこの伊勢佐木町から『親不孝通り』、かいわいをうろつきまわり、帰りは寮の門限に遅れて、門を乗り越えて入るのが常であった。こうして門の内側には入れても、玄関のカギはがっちり掛けられているから、それだけでは室内に戻るわけにはいかない。そこで遅くまで勉強している寮友の室のあかりを頼りに、そっと窓辺に近づき、ホトホトとガラスをたたいて窓を開けてもらい、やっと中に入れるという有様であった。二、三年後とは違い、まだダンスホールもあればピリヤードもやっており、遊ぶ場所にはこと欠かなかった。前記S・Bの家族が伊勢佐木町の映画館・オデオン座の裏あたりで経営していたライオン・ピリヤードは、高商生たちのたまり場になり、そのゲーム取りのかわい子ちゃんを学生同士で張り合ったりしたものである。

当節でいえばさしづめアルサロとかキャバレーに似かよった「新興喫茶」というのが当時はやった。『喫茶』とはなっているが、もちろんアルコール類が飲めて、ホステスがお酌してくれる。そのホステスがマイク片手に、店の一角にしつらえられた舞台に上がり、バンドの生演奏をバックに歌もうたう。二年生のころ、美しい従姉妹に失恋した十五回

の代表的なものであった」(遠山茂樹ほか著『昭和史』)とされる。しかし、第一次世界大戦後の日本資本主義の勃興期にあたって、明るさと躍動に満ちあふれた大正の前半期とはちがって、時代は、太平洋戦争の開戦を目前にした、準戦時統制経済下のグルーミイな日々であった。そこで、『悲劇の哲学』を書いたシェストフ、人間は絶望して生きている、絶望こそ『死にいたる病』であるとしたキェルケゴール、能動的、積極的ではあるがやはり虚無と否定とを掲げたニーチェが読まれ、さらに生の現実を肯定する途を模索して、ハイデッガーやヤスベルスの実存哲学が求められていった。大正デモクラシーの個人主義的人格主義や自由主義は、圧殺される寸前にあった。高商の一年生だった昭和十三年ころ、富士見寮の一室で夏目漱石のもの、とりわけ『心』をくり返しくり返し愛読していた十五回生のN・Kは「これを読んでいるあいだだけ、一時的にしろ、戦争のおそれを忘れさせてくれるから……」と語っていた。そのN・Kは、東京商大に進学して卒業後、直ちに陸軍部隊に入営、北支に送られてまもなく戦死した。十四、十五回生は、級友約百五十人のほぼ三分の一が戦没、戦争の被害を最も大きく受けた世代である。

上記のような寄物をむさぼり読んだ勉強家のO・Hが硬派とするならば、軟派には軟派のニヒルの世界があった。前記十四回生のS・Bは、高商に入ったころクラスメートの二割ぐらいがすでに童貞ではなかった、と語っている。そういう連中は、挙措動作がおのずから童貞組とは違って、どこかおとなびていた。当時の学生たちは、教室で木のイスにじかにすわると固くて冷いので、小さな座ブトンをシリの下に敷いていた。合併教室とか階段教室の授業で教室を移動するときは、この小座ブトンを二つに折り、そのあいだにテキストやノートをはさんで小わきにかい込んで歩くのが、一種の風俗でもあった。十四回生のなかに、X子という縫い取りのしてある小座ブトンを得意気に持ち歩く男がいた。真金町の職業婦人であるくだんの女性が、かれのために作ってくれたも



ラグビーに汗を流して

戦の昭和十六年後半、海軍予備学生として入隊していった。放縦のニヒルはもはや許されない時代になっていた。そして——日本の敗色いよいよ深まった昭和二十年の、まだ春も浅いある朝、すでに海軍大尉に任官して機須賀海軍通信学校に勤務していたN・Hは、下宿先での朝食後、新聞を取り上げて思わず息をのんだ。「栗栖陸軍航空中尉、壮烈な空中戦死を遂ぐ」の記事が、トップでデカデカと報道されている。あの栗栖ジュニアであった。栗栖中尉は、それまで撃墜敵機数十機を超える、戦闘機の名パイロットとして、米軍にも恐れられていた。本土上空の遊撃に飛び立ったその日の空中戦では、米軍機四、五機が栗栖機をマークして集中攻撃をかけてきたため、衆寡敵せず、栗栖機もついに火を吹き、相模湾の海中深く突っ込んでいった模様が、伝えられていた。「あのときも、われわれは

生のN・Hは、朝下宿を出ると、学校の坂をのぼるかわりに伊勢佐木町周辺に直行、ビリヤードで玉を突いて時間をつぶし、暮れかかると一ぱい引っかけでは、そうした新興喫茶に駆け込んだ。親から送ってもらった授業料（当時年額八十円であった）も、学校に納めずに使い果たしてしまうような幾月かの生活を過ごしたのだ。おかげで授業料を滞納し、学校の高林義雄庶務主任からお説教もくらった。

こうした放縦のはて、N・Hはラグビーに打ち込み、毎日汗まみれ、ドロまみれになってニヒルの殻を打ち払おうと努めた。昭和十四年度の対高工ラグビー定期戦が近づいていたのである。当時高工ラグビー部には、日米開戦前夜の駐米特派大使だった栗栖氏の子息が、スタープレーヤーとして活躍していた。アメリカ人の栗栖大使夫人とのあいだに生まれたこの混血のジュニアは、ゆうに一メートル八十五センチはあろうと思われる抜群の体格で、いつの試合でもかれにボールがまわると、一気にゴールに殺到し、相手を寄せつけなかった。かれひとり存在のために、高商を含む横浜所在の四専門学校が、高工には歯が立たなかったといってもよかった。そこで高商チームは「全員栗栖タックル」の作戦で、定期戦に臨んだ。試合まえは、くる日もくる日も、バックスもフワードもなく、全員ただタックルマシンにぶつかっていく練習にはげんだ。そしていよいよ弘明寺の高工グラウンドでの試合当日、高商側ゴール十ヤード付近で、球を受けた栗栖ジュニアが得意の猛進に移る直前、N・Hは日ごろ鍛錬のタックルで、かれの長いスネにダッシュした。地面にはいつくばったN・Hの肩に、九十キロはある栗栖選手の巨体のがしかかっていた。タックルは成功した。N・Hは味方の危機を救うことができた。高商側惨敗の予想をくつがえして、試合は11—11の五分の勝負におわり、高商チームは高工グラウンドで肩を抱き合い、感激に泣いた。

かつての伊勢佐木町かいわい散歩の日々がたたってN・Hは一年おくれの十六回卒業になってしまったが、開

栗栖選手めがけて集中タックルをかけた。しかし、あれは平和な日のラグビー競技のことだった。」日米戦争という冷厳な現実のまえに、混血の栗栖ジュニアが父の国の戦闘機乗りとして、母の国に敢然と立ち向かって徹っていった運命を思い、N・Hは暗然とせざるをえなかった。

2 断髪令・無定形の抵抗

十五回生が一年生として入学した昭和十三年四月、学校当局から断髪令が下された。一年生だけが全員坊主頭になれというのであった。同時に合同体操が正課となり、毎日昼間のひととき、全校学生がグラウンドに集められて、下津屋教授の号令一下、手足を伸ばしたり縮めたり。四月の下旬には学校報国団が結成され、勤労奉仕、体位向上、集団的訓練が綱領に掲げられた。昭和十五年暮れ、文部省の指令で、学生の運動、文化各部の活動も包含して各学校に設立された、本格的な報国団の前身である。

断髪令は当然のことながら、一年生のあいだに大へんな物議をかもした。通り一べんの指示ぐらいではだれもこれを守ろうとはしない。そこである日、当時生徒主事だった敬虔なクリスチャンの南種康博教授(商品学担当)が、三階の合併教室に一年生全員を集め、さわぎ立てる学生たちにとりかこまれながら、二時間あまりも、根気よく学生たちと討論したことがあった。戦時中のような問答無用にはまだなっていなかったのである。そのとき同席した配属将校も、これは少しく強い調子で時局がら学生の断髪励行を説得したが、そのときやおら立ちあがったひとりの学生が、次のように大声で論じ立てた。

「学生の長髪がそのように目ざわりで、切る必要を感じられるならば、われわれにとっては教官のヒゲが目ざわりでしようがない。まずそのヒゲからそり落とされてはどうですか。」

これを聞いた教官の一時とまどった表情に、学生たちの笑いがうずまいた。

しかし、これも所詮ははかない抵抗でしかなかった。夏休みまえから髪を伸ばしはじめ、いちばんうるさい教線の時間は、級友の代返ですまして、夏休みをまんまと長髪で過ごすことに成功した学生も、秋の新学期に登校すると、たちまち注意を受けて、坊主頭に逆戻りさせられた。こうして高商生は、十五回生をさかい目として、全員坊主頭の時代が戦時中までつづくことになる。この年の夏からは後述のように、集団勤労作業も開始された。

合同体操

これよりさき富士見ヶ丘の学園では、十三年一月の『高商学報』(第八十五号)に、学報部長の下田礼佐教授が年頭の辞を寄せ「時局に対処すべき学生の覚悟」と題して、支那事変下における学生の奉公精神を説けば、当時二年生の修了期にあった十三回生たちを中心として、学園内に「国際文化協会」が設立され、支那事変における日本側の立場について全世界の学生に理解を求めようと、学生のひとりがアビールの案文を草し、これを他の学生たちが英語やスペイン語に翻訳して、各国に発送しようという動きも起こった。しかし、前記の十四回生S・Bにいわせると、このように時局に真正面から取り組もうとしていた学生は、全体の三割ぐらいで、あとはノンポリというか、消極派が大部分。むしろ、日ましに加わっていくキャンパス・ライフへの統制に、反発する気分



そのころの寮生活

が強かったということになる。その三月、富士見寮からの退寮を目前に控えた十四回生の寮生たちは、ある夜突如一大ストームを起こし、寮中の窓のガラスというガラスを、ことごとくたたき割った。驚愕した生徒主事兼寮監の南種教授から「君たちのような狂暴劣悪なる学生は、本校開校以来はじめてである」とお説教をくらったあげく、さっそく父兄に手紙が出されて、ガラス代は父兄が負担せられる結末になった。これも、いまにして思えば、準戦時統制下に反発する無定形の抵抗の一種であったのかもしれない。南種教授は終戦直後、榮發失脚で亡くなったが、学生寮内での殺傷事件があい次ぐいま、もし生きておられたなら、果たして何といわれたであろうか。

こうした十四回生と入れかわりに入寮した十五回生の寮生も、この伝統？ にならって、寮生活のおわりころ、夜中しばしばストームに蜂起し、寮のガラス窓を割った。寮中のかかりを消して、真っ暗になった廊下に列をなし、『富士の白雫やノエ……』とはじまる「ノエ節」をくり返しくり返しみんなで怒鳴りながら、手にしたバケツをガンガンたたき、廊下をかつ歌い、かつ踊りつつ行進したものだ。何しろ真っ暗ヤミのことだから、何枚かのガラスはいつのまにか割れてしまう。当時寮監は哲学担当の宮成喜馬平教授にかわっていたが、ストーム

がエキサイトしてくると、その都度、宮成寮監が懐中電灯片手にとび出してきて、たちまち追い散らされてしまう。真摯な学究肌であったいまは亡き宮成教授を、こんなことで、だいぶ手古ずらしたものであった。

宮成寮監の前任者南種寮監から、開校以来の狂暴劣悪学生とラク印を押された十四回生たちは、二年生、三年生と進んでからも、教練の時間に級友たちが共謀し、三分の一ぐらいの学生が代返を頼んでエスケープするような離れわざをやったのけたりした。教室の廊下を、当時五冊ぞろい三円ぐらいで買った改造社版『資本論』の訳本（高島素之訳）を、ことさら目につくようにぶらさげて歩く級友もいたし、学生仲間が生徒控所のストープをかこんでの談笑のなかで「いちばん嫌いなものはとかけて？」とひとりがいえば、「カーキ色と解く」と別のひとりが答え、やんやのかっさいを浴びたりしたものだ。いまの若い人たちのあいだにも、ナゾナゾブームが起きていると伝えられるが、歴史の転換期にはナゾかけ遊びがはやるのかもしれない。自由の灯は、もうご臨終には近かったが、まだ消え果ててはいなかったのだ。しかし、前記のS・Bにいわせると、十四回生の卒業のときには、教練の出席日数が足りなくて、幹部候補生適格の合格証をもらえなかったものが、二十人ぐらいいいたという。こういう若ものたちには、「兵適」（一兵卒が適当）という配属将校の判定が、入営先きの部隊に送られている。当時の配属将校佐分利重雄大佐は軍人としては教養のあるほうで、学生たちにむしろ「物わりのいいおやじ」といった感じで受けとられ、S・Bたちがいっしょに酒を飲んだりして、出席日数の不足を心配したりすると、「大丈夫だ、大丈夫だ」といってくれたりしたのだが、いざフタをあけてみると、やっぱり締めるところはきちんと締めていた。そのころの時の勢い、軍部の方針というものは、一配属将校の人がらなどをはるかに超えた、強い力で働いていたわけである。S・B自身もこの「兵適」組で、卒業後兵隊に行ってから、だいぶ苦勞をさせられた。

もっとも、なかにはこの「兵適」が幸いして、生命長らえられた、というものもある。

十五回生のS・Sも断髪令へのはかない抵抗をつづけたひとりだった。髪を伸ばしてからは級友に教練の代返を頼んだり、勝手にエスケープしたりで長髪を培養するまでがいいが、そのうち見つかって坊主頭に逆戻り、といったことをくり返していた。おかげで卒業時の教練の成績は「兵適」。軍隊に入って中国大陸に駐屯する部隊の庶務をやらされているとき。配属将校から部隊宛に送られてきた成績証を、自分の目で見たいうからまちがいはない。S・Sはこの兵適のおかげで、以来一兵卒として部隊の庶務や経理系統の部署で過ごし、かすり傷ひとつ負わずに復員することができた。「下級将校の消耗率がいばん大きかった戦争だから、下手に幹部候補生にでもなっていたら、とても生き延びることはできなかっただろう」と、後日、本人は述懐している。まだ新兵の時代に、内務班の班長だった軍曹に貸しをつくったこともプラスした。ある夜不寝番に立っていると、班長の部屋から煙が上がった。驚いてとび込んでみると、班長の軍曹は、空にした一升ビンを床の上にころがしたまま、高いびきで寝こんでおり、タバコの吸いがらからそのへんのものに燃え移ったらしい。あわててたたいたり踏んづけたりして、火を消しとめ、このことは週番士官に報告せず自分のハラだけにしまっておいた。それを多とした班長が古参兵たちにも「あいつは俠気のある男だから大事にしてやれ」といったようなことをいつてくれたらしい。ほとんどピンタもくらずにすんだ。しかし、もし幹部候補生の資格を持っていた志願をしなければ、そのこと自体反軍的と見られたような時代であったから、「兵適」でなければ部隊の事務のような比較的安全な部署にいつづけることはできなかっただろう、と本人は語っている。

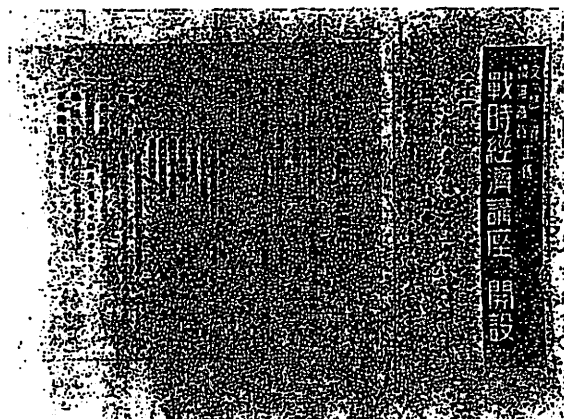
3 自由の灯は消えなんとす

——学報部事件、「表現」問題など——

昭和十五年の春、三年生に進んだ十五回生のM・Mは、学報部の幹事として、学報の編集に一大改革を加えようと思いついた。同部の学生幹事が集まって相談した結果、それまでは、集まった原稿を学報に掲載するまでに、必ず学報部長(当時下田礼佐教授)の検閲に供していたのをやめて、掲載原稿に対しては、われわれ学生幹事が全責任を持つてではないか、つまり、部長にはいっさい見せないことにしよう、ということになった。さらに、投票欄を作つて勝手な気焰もあげる、論説はM・Mが寄けということになって、かれは「文化講演について」という一文を草した。

「文化講演」は、文部省が昭和十一年から、大学高等各校に開設した日本文化講座のことである。昭和初年、学生の「思想普導」のため文部省に設置された学生部は、その後思想局となり、さらに教習局に拡大されていたが、軍国主義ファシズムの進展とともに、この教習局を中心に推進された学生対策は、従来の思想対策から、さらに教育全般の軍国主義化をめざすものに強化されていた。このため十一年には文部省内に諸学振興委員会が設けられ、著名な大学教授たちが動員されて「日本精神の本義に基づき、各種の学問にわたつてその内容および方法を検討し、わが國独自の学問文化を創設發展する」(『横浜高等商業学校二十年史』)ことが、奨励されたのである。

さらに文部省は、昭和十二年三月「国体の本義」と題するパンフレットを全国の教育関係者に配付、個人の市民的自由の確保を基調とした西欧の民主主義思想を排撃、「尽忠報國」「滅私奉公」を説いた。こうして、同年秋か



「戦時経済講座」の掲示

い出されるのは、話の中味が暗かったせいかもしれない。そのころ同教授は、後藤隆之助、風見章、三輪寿壮、三木清、笠信太郎、佐々弘雄などとともに、近衛文磨公のブレーンといわれた「昭和研究会」に参加していたはずであるが、この会そのもののねらいのひとつが、軍部の横暴をいくらかでも牽制しようというところにある。M・Aが会った蠟山教授の身辺には、いかにも逼塞（ひっさく）している自由主義者という沈鬱なたたずまいが、色濃く感じられた。こうして開催された蠟山講演の内容は「文化講演」とは違って学報にその要旨が掲載されることもなくおわり、いまは思い出すよすがもなくなってしまったが、問題の論説を書いたM・Mは「蠟山政道氏を迎えたときの喜びは、私にはひとしおのものがあつた」とのちに記している。



富士をバックに軍事教練

らは、前述のように、国民精神総動員運動が展開されるにいたる。「文化講演」はこうした動向の一環であり、高商では一年間に五回から三回ぐらゐ、外部から講師を招いて、講演会が開かれていた。しかし、学生たちにとっては『国体明徴』のご高説を、何時間にもわたって拜聴させられるのが、すこぶる面白くない。そこでM・Mは「せっかくの催しであるから、講演者の選択を学生の自治に委せたらどうか、講演部、学報部、音楽部といった文化各部の組織を利用して、もっと面白いものがきけるようにしたい」という趣旨の二段にわたる大論説を書いた。『高商学報』第百七号、昭和十五年四月二十二日付発行の紙面は、このようにしてできあがった。学友たちからの反響を期待してワクワクしているところへ、学報部長で生徒主事も兼ねていた下田教授から、M・Mら三年生の学報部幹事に對して「次の隣後に出席するに及ばず、至急来室せよ」という呼び出しがかかった。

M・M、S・H、K・Mの三人が、下田学報部長から相当長時間にわたってお説教をくらった。原稿の検閲をさせなかったこともいかんが、「文化講演について」という論説を部長の知らぬままに載せ、しかも、その論旨、内容、すべてきわめて自由主義的で、まことに危険である、責任者の処置を考えねばならない、ときついお叱りであった。自由主義は、そのころすでに危険思想だったのである。その日の午後、こんどはM・Mひとりが校長室に呼び出された。入っていくと、下田教授をかたわらに控えさせて、田尻校長が何やら白い紙を持って立って

いる。M・Mはいよいよ退学処分か、と一瞬観念したが、白い紙は、戒告を申し渡す、という趣旨であった。すんでのところ罪一等を減じられたわけである。

しかし、このM・M論説のききめがあったのか、その後まもなく「文化講演」とは別に講演部主催の講演会が認められ、自由主義者として軍部からきらわれていた蠟山政道教授を講師に迎えることができた。講演部の幹事として、この講演会を企画し、蠟山教授への依頼交渉を行なったM・Aは、たぶん東京中央線沿線のあたりだった蠟山邸を訪問した日の印象を、いまでも忘れられない。招じ入れられた書斎のなかで、えらく暗かったように思

これより先き、昭和十五年の一月には、学友会主催の音楽会が、プログラムも印刷し、キップも売り出した段階で、突然中止される異変が起こった。同年は、戦後はあまり使われない日本紀元で二千六百年にあたる年だったので、いろいろな記念行事が行なわれた。この音楽会も、紀元二千六百年記念という名分をまず掲げ、同時に、卒業生（十四回生）送別という趣旨で予定され、当時ソプラノ歌手として世界の楽壇にもその名が通っていた関屋敏子女士の賛助出演がきまっていた。『高商学報』第百五号（昭和十五年一月十五日付）は、「学友会主催の音楽会が、来たる一月二十八日（日曜日）午後六時半から、開港記念館で開演する」ことを予告し「関屋敏子女士のような本格的な歌手が、学校音楽会に出演するのは稀有のことである。同時に、新しく誕生した本校管絃楽団が処女公演する」として、単に音楽部主催の会ではなく、学友会主催の、全校挙げての催しとしてこれを位置づけ、学生たちの意気込みを示していた。当夜のプログラムは、関屋敏子女士の「私はあなたを愛す」ほか八曲の独唱をはじめ、高商管絃楽団本邦初公演のハイドン「驚愕」シンフォニー・第二楽章、高商ブラスバンドの演奏、同グリー・クラブの合唱、同ハーモニカ・ソサエティの合奏など、なかなかの豪華版だった。それが、直前になって突然、学校当局から中止命令が下されたのである。

当時、三年生を送り出す側の二年生（十五回生）として、この音楽会の開催に奔走したS・Tの回想によると、警察のほうでも、いったん許可したものを中止されたのではメンツにかかわると、警察署の係官がわざわざ学校までやってきて、開催させてはどうか、といってくれたが、生徒主事の下田教授がどうしても首をタテにふらない。「関屋敏子だけの独唱会という形で、学生がそれをききにいくというのならかまわない。しかし、どうしても原案のままやろうということなら、君たちに学校をやめてもらうほかはない。」そういう生徒主事のきびしい言葉のまえに、黙って引きさがるほかはなかった。当時文部省は学生の自主的な集いを極度に抑圧していたか

ら、その方面からの強い圧力があったのかもしれない。下田教授もすでに亡き人の数に入ってしまったが、戦後、昭和三十年代の半ばすぎ、十五回生のクラス会に招かれた同教授は、S・Tの顔を見つけるなり「あのときはすまないことをした。ああせざるを得ない時世だったんで……」と声をかけてこられた。音楽会のオの字も出なかったが、ああ、あのときのことか、ふたりのあいだには電流のようにかよい合うものがあり、歳月が一瞬にして過去のわだかまりを押し流していた。

ともかくも、このようにして音楽会はつぶれてしまった。高商管絃楽団の旗揚げというのは、じつは高商には絃楽器の弾き手があまりいないところから、弘明寺の高工生の応援出演で格好をつけようということだった。このため早くから自校のオーケストラを持っていた高工との合同練習までやってきたのだったが、すべては一朝の夢におわった。開催予定日だった一月二十八日、S・Tらは開港記念館の前に何時間も立ちつくして、前売券の払戻しをやらねばならなかった。真冬の寒さがひとしおこたえる日であった。送られる側だった十四回生のひとりY・Kは「学校はひと箱のマッチに似ている。これを重大に扱うにはバカバカしい、これを重大に扱わなければひどい目にあう（音楽会演ゆ）」と、卒業アルバムに無念の言葉を残して、富士見ヶ丘を去っていった。

十四回生たちの哲学グループは、のちに名古屋市立大学の教授となるS・Uらが中心となって、哲学同人誌『コギト』を創刊した。デカルトの「コギト エルゴ スム」（われ思う、ゆえに、われあり）という有名な言葉からとった題名であった。これに刺激されて、まだ二年生の末期にあった十五回生の文芸愛好家たち九名が、創作同人雑誌『表現』の発刊を企画、十五年の二月中旬に生徒主事の許可ももらった。前記の「学報部事件」でM・Mといっしょに下田教授から油をしばられたS・Hがいろいろ出っぴきで、のちに大阪市立大学の教授となるS・T、大新聞の経済記者となった隣演部幹事の前記M・Aらが加わり、三年になった夏休み近くに、ガリ版刷りではあ

ったが、首尾よくその創刊号ができた。ところが、同人連がハナ高々となっていた矢先きに、警察署から思いもかけぬ呼び出しをくらった。同人のリーダーで、学報部幹事でもあった前記S・Hの書いたロシア風コントのなかに、「抱え切れないほどに肥満した大きな腰」という表現があり、これがその筋のお気に召さず、学生の分際で何たるワイセツぞや、と風俗壊乱(一)の容疑に問われたこと、また、前記S・Tの書いたものが時局批判・反戦思想のきざしあり、というのが問題点だった。とにかく、出版物はいっさい、警察に届けなければならなかった暗い時代のことだ。いまは九州で自動車販売会社の代表におさまっている、同人中の最年長者で編集名義人だったK・Hと、実質編集者のS・Hとが毒罠に出頭して、始末書を取られ、二号以降は出さないことを誓約させられて、一件落着となった。同人を代表してS・Hが、田尻校長からお目玉をくらったことはいまでもない。

映画評論よし文学評論よしで、当時富士見ヶ丘きっての文芸家であったこのS・Hも、いまは東北の電力会社でコンピュータ室長のイスにすわり、すっかりメカニカルな世界の住人になってしまったが、「あのとき『これはあくまでも同人回覧誌だ』と押し通して、刊行をつづければよかったかもしれない。もっともあとで見つければ、こんどは始末書どころか、治安維持法違反にでも引っかけられただろう。表紙は、当時独立美術展会員の久保田氏に描いてもらい、何号か出すつもりで銅板も作っておいた。あのあざやかなグリーンが目につかぶようだ。伊勢佐木町近くのガリ版屋のオヤジも、出血サービスで刷ってくれたのに……」と、いまだに無念やるかたない面持ちである。

同じころ、やはり三年生(十五回生)のK・Sの提唱で、経済学研究の集まりを持つ、ということになり、「文化講演」論説を書いた前記のM・Mや、のちに国大教授となるM・Y(十五回生)、N・K(十六回生)など、

二十人ぐらゐのグループができた。渡辺輝一教授に指導を引き受けてもらい、同教授から「経済文化の会」という名前もつけてもらって、テキストにはマックス・ウェーバーの『社会科学方法論』を使うことにし、二、三回会合を持った。ところがある日、K・SがM・Mのところに行って「どうも困ったことになるらしい」という。その筋から指示がきて、指導教官は会の運営だけではなく、会員個々の私生活の面まで責任を持たねばならんということだ、というのだ。それでは渡辺教授に迷惑をかけることになるから、残念ながら自主的に解散しようということになった。発足以来、わずか二カ月あまりのことであった。提唱者のK・Sも戦死していまはもう世にない。

すでに前年(昭和十四年)の九月、ヒットラー・ドイツのポーランド侵入をきっかけに、ヨーロッパ大陸では第二次世界大戦の火ぶたが切られていた。さらに、十五年九月、日本は日独伊三国のいわゆる枢軸同盟に閣印して、独伊側への加盟を明らかにし、軍部は着々と参戦への準備を進めていたのである。このころになると、マルキシズムに関する本は、警察の手入れで一夜のうちに全部古本屋から姿を消してしまうし、帰省の途中で『改造』や『中央公論』を読んでいて、移動警察に取り調べられる学生も出てきた。いちばんアワを食ったのは、勤労奉仕で不在中の学生の居室を、特高が調べ歩いているというウワサがとんだときで、M・Mは急いで下宿にとんで帰り、乏しい蔵書のなかから、それらしい書物を人目につかぬところへしまひ込むのに、ひと苦勞しなければならなかった。

こうして、十五回生たちが卒業を控えていた昭和十六年の早春、開校当初から年一回発行されてきた学友会誌『不二見ヶ丘』も、ついに廃刊された。学園の自由は失われようとしていたのである(この項は、『富士金報』第三号、高商十五回生・松本宗信「私の三年間」などによった)。



箱根報国寮で勤労作業

校二十年史」に記されている。箱根報国寮は、湯本町畑宿の須登川溪谷の傾斜地、海拔四百メートルの山の中に、当時神奈川県が学校報国団員の修練道場として設置したもので、昭和十三年七月はじめ完成したばかり。高商生がさいしょの入寮者となった。前記のように林業技師一名が寮長で、その下に指導員数名がいた。

翌十四年も、この箱根報国寮には、高商生の第一班五十名が七月中旬、第二班五十名は八月末から九月はじめのそれぞれ一週間ずつ入寮、以来戦時中まで毎年、高商生がここに送られて、上記のような修練と労働の何日かをすごした。森林作業の現場は、近いところでも寮から一キロ、遠いところは四キロも離れており、とくに昭和十四年の二回目の入寮者は「時あたかも二百十日、荒天期の前後に

4 集団勤労作業、興亜青年勤労奉国隊始末

集団勤労作業は昭和十三年の七月から開始された。前年から国民精神総動員運動を開始して、総力戦体制を固めようとしていた政府は、ナチス・ドイツの青少年たちがやらされていたアルバイト・ディーンストをまねて、学生の労働力の利用を思いついたものだ。文部省は同年六月、中等学校以上の学校に通牒を発し、農林業や軍関係の簡単な作業に、学生を年間三日から五日間程度従事させることを指示したのである。はじめはこの程度ですんでいたが、翌十四年には、この集団勤労作業が漸次恒久化されて、正課に準じて取り扱われることになり、十五年には、一年のうち三十日以内の日数を、授業をやめて勤労作業に充てるように強化された。さらに、十六年十二月の太平洋戦争開戦以後は「国民勤労報国協力令」のもと、学生は戦線に召集された労働力のアナ埋めとして勤労動員の対象となり、戦局の悪化とともに、ほとんど授業も受けられずに、労働に明け暮れることになっていく。

さて第一回の集団勤労作業は、十三年の七月十日から五日ないしは一週間にわたり、全校をあげて実施された。三年生（十三回生）のうち五十名は、この年から箱根湯本町の山あい新設された神奈川県立報国寮に一週間入寮、その他の学生たちは、国電原町田駅から当時座間にあった陸軍士官学校にいたる、延長約六キロの行幸道路の改修工事に毎日かようなもの、学校校庭の草むしりと地ならし作業にかり出されるものなど、いくつかの集団にわかれて、真夏の数日間を汗水たらして労働に従事した。もちろん、大部分の学生たちは喜び勇んでこれに参加したわけではないが、準戦時体制の強化とともに、しだいにあきらめムードが支配的になっていった。さきに述



興亜青年勸業奉報隊

また、この十四年の夏から「興亜青年勸業奉報隊」に参加して、中國大陸で勸業奉仕に従事する学生が高商からも派遣されることになった。同年から文部省教務局が募集を開始したもので、同年は武市一孝助教授(理化学担当)を隊長として学生五名が参加、一行は七月上旬横浜を出発、ソ満国境付近で勸業作業を行なって、八月末帰校した。この年四月、満蒙国境のノモンハンで日ソ間の戦闘が起こり、このころ関東軍はつぎつぎと同方面に兵力を増派して、戦闘を拡大していた時期であり、ソ満国境でも学生たちは、そうした一触即発の緊張のうちに労働に従事した。一行が横浜を出発した直前の七月六日、ノモンハンの戦線では、浜の早慶戦にも活躍して名投手とうたわれた、十二回生の前蔵元野球部選手が、軍隊に入ってからわずか四カ月後に戦死を遂げており、戦火の影響は、しだいに学園の周辺におおいかぶさっていた。

翌十五年の第二回興亜青年勸業奉報隊は、北支方面に派遣され、高商からは三年生(十五回生)のS・Kら四人と二年生(十六回生)K・Mの五名が参加した。一行は七月中旬、まず習志野で南京虫に悩まされながら、訓練を受け、部隊編成を終えたのち、神戸から乗船して北支の太沽に上陸、以来真夏の約一カ月を、天津、北支、青島、済南、兗州と、北支の各地をまわった。滞在地では、宿舎になった兵舎と勸業奉仕先の工場とのあいだを、トラックで往復する毎日、外部からの情報もなく、外出の自由も与えられない生活だった。移動のときは、

相当し、とくに箱根のとき山地においては、しばしば豪雨車軸を流すがときもありしも、全員こころも屈せず、意気ますます高まり、さいわい二回を通じひとりの傷病者もなく、かえって健康を増進したるほどなり」(前掲『横浜高等商業学校二十年史』と、苦行の跡が記されている。

この十四年には二年生(十五回生)の一行百名が、七月中旬の一週間、小田原荘の大雄山最乗寺に宿泊、寺有林の林道開きく工事に汗を流した。最乗寺は通称「道了尊」、いまでも例祭が盛大に行なわれる名刹で、神奈川県足柄上郡の人里離れた山中にあり、付近一帯は、杉、ヒノキ、松などの老樹がうっそうと茂り、いかに禅宗の修業地にはふさわしい場所であった。十五回生たちはここで、昼間はシャベルで木の根っこを掘ったり、モッコで土をはこんだりの土方仕事をやり、夜は精進料理を食べたあと、座禅を組んで、住職の法話をきくという毎日であった。座禅のさいちゅう、昼間の疲れが出て、ついコックリコックリとやり、六尺棒で肩をたたかれたものもあり、若い禅僧に哲学論争をいどんで、勝負つかず、というものもあった。学生たちがつくった林道は、いまはどうなっているか知るよしもないが、あたり一帯の空気があくまでもすがすがしかったことは、いまになつかしい思い出である。

身体虚弱組として、道了尊行きの一行には加わらなかった十五回生の一団は、同じころ山下公園の銀杏の枝刈りにかり出されていた。そのなかに加わっていたM・Yは、ふと枝刈る手を休めて海のほうを見やった。いまし横浜港を出る内航船が、沖合へするすると動いていく。あれは神戸へいく船にちがいない。勸業奉仕(学生たちは集団勸業作業のことをこう呼んでいた)の代返を自分に頼んで帰省した学友は、おそらくあれに乗り込んだのだろう。当時関西方面からきている学生たちにとっては、豪華な気分を味わえる船で帰省することが、ささやかな楽しみのひとつであった。港を出ていく船の汽笛の音に、M・Yは望郷の念に駆られる自分をおさえることができなかった。



「このクーニャンはどうなったか？」異国青年勤労奉仕隊一行

牛馬や豚を輸送した有蓋貨車に詰めこまれることが多く、酷暑のなかで、異様な臭気をするのに一行は閉口した。また荒野のなかで汽車が止まってしまい、何時間も、ときには半日も動かないこともあった。青島を除いては線がなく、ただ平らな黄土の大陸に、ときに大岩のような小山がポコッと突き出ているだけの変化のない風景が、いまでもS・Kの印象に残っている。

同行した三年生のA・HとY・Iが、途中何かの原因でつかみ合いのけんかになったことがあったが、これも今にして思えば、このように抑圧された毎日の生活から累積していた欲求不満が、一時に爆発したものであったろう。勤

労奉仕らしい作業をしたのは、支那事変の発端の地、蘆溝橋での道路づくりくらいで、済南の製粉工場では、日本の学生さんを働かせては、中国人労働者へのシメシメがつかなくなるからと、毎日応接室のような娯楽室が与えられ、ふかし立てのマントウのおやつが出た。そればかりか、そこでの勤労奉仕期間のおわりには、大飯店で最高の支那料理をご馳走になった。大明湖の蓮根があまりナシのようにうまく、鴨の腦みもおそろおそろ食べたが「その多彩な料理はいままでに食べた中華料理のなかで最高のものであった。従って私の一生で最もうまい中華料理は、これだったということになる」と、S・Kはのちに記している。

北京の兵營に宿泊中、第九回生のF・Sがその部隊の將校で、酒保でご馳走になったあと、酒保のかわいい

クーニャンといっしょに写真をとった。久しぶりの女の子との出会いに、だれもが彼女たちのそばに寄って写真にうつりたがったが、この少女たちの人生はこれからどういうことになるのだろうか？というのが、そのときふとS・Kの心をよぎった恐れに似た感情であった。やがて一行は、太沽に逆戻りして、再び玄海灘を渡り、八月のおわりに神戸に帰ってきた。広漠とした中国大陸にくらべて、船中から望む縁の島や山の変化に富んだ日本は、何と美しい国に思えたことか。後日中堅住宅建設会社の社長になるS・Kは、それから四年後に、そのとき神戸に出迎えてくれた従妹の姉と結婚するのだが、この結婚に対して、一行が北支にむかうとき寄港した門司で見送ってくれた遠縁の娘の妹から、姉の気持ちも知らないで、という長文の抗議の手紙が、のちにかれのともに寄せられた。いずれにしても、S・Kのその後の人生に縁深い北支行ではあった（北支派遣隊の項は、十五回生清水喜治の手記による）。

九月の新学期早々、この北支派遣隊の報告会が、講堂に全校学生を集めて開かれた。そのとき報告者のひとりとして演壇に上がったY・Iの両のマユ毛が、青々と剃り落されているのが、みんなの目に異様にうつった。北支でA・Hといい争ったことを恥じ、反省のしるしに剃り落したらいい、ということが後日わかった。日ごろ朴歯の高ゲタをはき鳴らし、両肩をゆすって富士見ヶ丘の坂をのぼりおりして、硬派中の硬派をもって自任していたY・Iの、いかにもかめらしい所業であり、宵々としたマユ毛の剃りあとが、生々しいまでに、青春の血に燃えたぎったかれの「男」を感じさせたものである。

5 学校報国団結成、開戦へ

第四章 軍靴の音高まる果てに

昭和十五年は太平洋戦争開戦直前の、疾風怒濤の一年であった。七月、第二次近衛文相内閣成立の前後から、近衛を盟主としていわゆる「新体制運動」が起こり「新体制」「臣道実践」「承昭必誦」といった皇道主義の言葉が流行となった。九月には、内務省訓令で、隣組、町内会、部落会の整備強化方針が出され、全国津々浦々に隣組の「アミ」の目が張られるようになり、政党はぞくぞく解散して十月には大政翼賛会が結成される。総同盟などの労働組合も解散して、十一月には、官製の労資協調組織である大日本産業報国会が発足した。

この間、九月には日本軍が北部仏印に進駐、また日独伊三国同盟が調印されている。国民生活の面でも、これに先き立つ四月下旬に、米、味噌、シロウ油、砂糖、マッチ、木炭などの必需品にキップ制の採用が決まって、経済統制が国民のくらしのすみずみまでを、がんじがらめにしはじめていたし、十一月一日から、全国のダンス・ホールがいっせいに閉鎖された。十月三十一日の夜は、どこのダンス・ホールも「こよいかぎり」で超満員、終曲の「ほたるの光」でワルツを踊ったあとも、人びとはつきぬ名残りに、なかなかホールを立ち去ろうとはしなかったと伝えられる。前々節で記したように、学生の自主的な試みがつぎつぎと挫折させられていった事態は、このような時代の奔流を背景としていたのであった。

そして同年十一月末、新体制の波は、ついに正面から学園に押し寄せてきた。開校以来学生の運動部、文化部活動の支柱であった学友会が解散させられ、かわって学校報国団が結成されるにいたったのである。これに先き立ち文部省が、八月に全国高等学校長会議、十月には全国専門学校長会議を開いて、この結成を進めていたもの

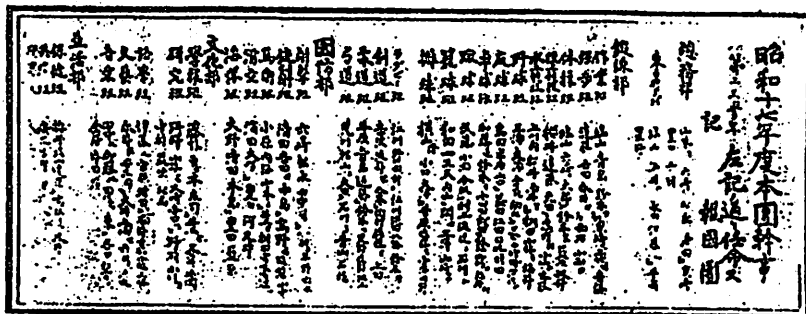
で、そのねらいは、それまで多少なりとも認められていた学生の自由自治を完全に排し、キャンパス・ライフを学校の完全な統制下において、国家奉仕を第一のものにしようとするものであった。

こうして十一月三十日、富士見ヶ丘の学園では、学友会の解散式に引きついで報国団の結成式があげられ、総務、鍛錬、国防、文化、生活の五部から成る、横浜商報国団が発足した。総務部は学友会時代のそれとあまり変わらず、生活部も消費組合活動などを吸収したものだったが、鍛錬部のなかに、従来の野球、庭球、陸上競技、柔・剣道などの各部が、それぞれ班として吸収され、たとえば野球部は、報国団鍛錬部野球班ということになった。文化部も同様、従来の文化各部が、それぞれ班として吸収された。報国団組織の眼目は、国防部が新設されたことだ。そのなかに、射撃、銃剣術、馬術、滑空、海洋といった各班が設けられ、軍国主義的な訓練がついに学生生活の全面をおおうことになってきた。団長は校長があたり、副団長、部長、班長は教官のなかから団長が任命、従来は学生が互選していた各班（従前の部）の幹事も、団長の任命制となり、学生自治の芽は完全につみ取られるにいたった。

この学校報国団は、翌十六年になると、軍隊式の学校報国隊に再編成される。内外情勢の緊迫化とともに、文部省が学校報国団を指揮系統の確立した軍隊式組織に改めるべきだとして、同年八月、全国の直轄学校等の校長に訓令を発したた

図 査 練 教





報国団結成

めである。高商ではこれに従って、各クラスを小隊、各学年を中隊に編成することにし、三年、二年、一年と貿易別科を、それぞれ第一、第二、第三中隊として、全校あわせて一個大隊の組織とした。總隊長は校長、大隊長は岩本教授、各中、小隊長もそれぞれ教授があたることにして、学校報国隊は九月六日結成された。学校そのものが、軍隊化への道を歩みはじめたのである。

これよりさき同年六月には、ドイツ軍のソ連領侵入によって独ソ戦が開始され、七月、日本軍は南部仏印に進駐、同月、米英両国は対日資産凍結を行ない、十月には、東条英機内閣が成立、開戦は目前にせまっていた。三年ほどまえの英語の教室で、ひとりひとりの人間同士の国境を越えた理解と信頼に、祈るような期待をこめたスレッシャー教官も、また、もうひとりのイギリス人カメロン教官も、すでに十五年の暮れごろあい次いで帰国しており、さらに、カナダ人のコース教官も、学校報国隊の結成された十六年九月、あわただしく帰国していった。かわりに、日本人の音楽家恒子夫人を持ち、日本国籍になっていたゴントレット教官、ドイツ系のフランク教官が来任したが、開戦後の十七年春からは、英語および第二外国語の授業が大幅削減され、とくに英語は、敵性語と視されることになる。横浜の土地がらにふさわしく、開校以来豊かな国際性を持っていた学園の伝

統は、まさに息絶えようとしていた。

こうして昭和十六年十二月八日がやってきた。「帝國陸海軍は、今八日未明、西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」という、あの大本営発表のラジオ放送が全国に流され、高商生たちは朝の眠気を吹きとばされて、ぞくぞくと富士見ヶ丘にのぼってきた。学生たちは、正門を入ると右手にあった、学校事務局庶務課長・高林義雄（現相模女子大学理事・事務局長）の官舎の玄関付近にむらがり、ラジオからの声に耳をそばだてていた。真珠湾奇襲の詳報が流れるたびに、学生たちはワーッと歓声をあげる。時の流れは、ついに来るところまできた。開戦直前の十一月には、十六年度（十六回生）の卒業時期を三カ月くり上げて十二月に、十七年度（十七回生）は半年来り上げて九月にすることが決められ、同時に、文科系学生の徴兵猶予期間を一年短縮することが決まって、軍服を着る時期がそれだけ早まっていた。「戦争と死」とはもはや現実の問題となった。若ものたちにとっては、祖国の守りにつくことに価値を見いだす以外に、生きるすべはなくなったのである。

翌十二月九日午前十一時半、富士見ヶ丘の校庭で、宣戦布告の詔書の奉戴式が挙行された。田尻校長は「（前略）朕茲ニ米國及英國ニ対シテ戦ヲ宣ス（中略）朕カ衆庶ハ各々其ノ本分ヲ尽シ億兆一心國家ノ總力ヲ拏ゲテ聖戦ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ（後略）」とする天皇の大詔を奉読したあと、全校学生に対して、次のような訓示を行なった。

「わが精鋭なる陸海軍は大詔を仰いで決然立ち、開戦劈頭、戦史に未だ曾て見ざる大戦果を収めたが、われわれはこの大戦果に幻惑されて徒らに興奮することなく、冷静にその本分たる学業に精励するとともに、一旦緩急の際は、いっなりともペンを捨てて剣をとり、一切を捧げて國に殉ずべき覚悟こそ大切である。」



本館屋上の慶祝喧

初空襲の話題が消えるまもなく、この年も、学園では対高工野球定期戦の準備が進められる。前述のように、野球部はすでに十五年の暮れから学校報国団鍛錬部野球班となり、野球部長の小幡孫二教授も、鍛錬部長兼野球班長ということになっていたが、一年の前半が野球定期戦を中心に過ぎるキャンパス・ライフのパターンは、この年までは、まだそう大きくくずれていない。戦争に入ってから、宣戦の大詔の「奉戴日」に定められた五月八日に、高商、高工同時に応援団の結団式が行なわれた。前年の定期戦では高商陣は、前々年（十五年）に引きつづき、二回戦でストレート勝ちし、富士見ヶ丘健児の意気は大いにあ

6 緒戦の空襲、戦時下最後の定期戦

昭和十六年から実施されたくり上げ卒業で、短縮された期間分の授業時数が在校期間中に振りかぶってきたため、十七年に入ると授業時間が大幅に増加した。そんななかでも、対高工野球定期戦の準備が進められ、その他の運動や文化活動にも、学生たちは結構精を出していた。

そうした戦時下二年目の春、四月十八日の昼さがりのことであった。学校の正門にあがってくる坂道両側の桜並木も、すっかり花が散りおえて、青い若葉がまだ幾分かのおさなさを残しながら、陽ざしに輝いている。十四、五回生の先輩の話では、この桜のトンネルが満開のころ、松竹映画の大船撮影所から、よくロケ隊がやってきたものだという。佐野周二や高峰三枝子といったスターの姿が見られた。清水宏監督が大学シリーズの映画を製作していたところのことだ。まだ平和な日々のお話である。そんなことを思い出しながら、二年生（十八回生）の何人かが、テニスコートで練習に打ち込んでいると、久保山方面に高射砲を射つ音がきこえ、飛んでくる飛行機の姿が目に入った。

高射砲弾がどんどん射ち上げられて、破裂する黒い煙がっつぎにパッ、パッと広がるが、みんな飛行機のとを追っている。演習にしては少し派手すぎるな、と思ってみていると、一たん何かの影に入ったかんだんの飛行機は、アッというまに、グラウンドの上を超低空でやってくる。乗員の姿も見える近さだ。グラウンドの一角でラグビーをやっていた学友たちが、日本機と思って手を振ったりしている。とたんに、本館屋上にできていた監視哨から「何してるかーッ！ 危い、早くかくれろ！」と叫ぶ声が耳にとび込んできた。教練教官の小白寛大尉

の声だ。ひょいとみると米機のマークではないか。「あわてて校舎のなかへかけこんだことを覚えています。」（高商十八回、K・Tの回想）

ノースアメリカンB25機による、米軍の日本本土初空襲であった。このときは、東京を中心とする京浜地方、中京、および阪神地方が襲われたが、まだ、日本軍が緒戦の勢いで勝ち進み、本土の制空権を完全に握っていた段階だから、被害はごく軽微に止まった。この年入学した十九回生たちが、この空襲の直後、川崎の日本鋼管に勤労動員でいったところ、工場構内が、ここから先きは学生の立ち入り禁止というので、きいてみると、四月十八日の空襲でかんじんの電気炉あたりがやられ、相当ききめのあった爆撃だったらしい、ということがいわれた。また、堀の内のほうにあった火薬庫が焼夷弾にやられたらしい、といううわさも、学生たちは耳にした。空襲のあと、学校のテニスコートには、高射砲弾の破片があちこちに突きささっていたりした。しかし、戦争末期の大空襲にくらべれば、問題にもならないことであった。



防空演習

がっていた。前年の定期戦では、また、当時、高商三年に在学中のタイ国留学生キム・ヘン・シュティクル君（十六回生）が、高商応援団全員に夏ミカンを贈り、感激を呼んだ。留学生のとほしいサイフのなかから、五百名前後にのぼる応援団全員にわたる夏ミカンを配ることは、並たいていのことではなかったはずで、いまでも学友たちは、このシュティクル君の好意を、感謝をこめてなつかしんでいる。同君は帰国後、タイ国外交界の重鎮に昇進、現在、駐韓国タイ国大使の要職にある。日韓関係が複雑化し、東南アジアでは、日本人が「エコノミック・アニマル」視されている今日、この戦時下の富士見ヶ丘における青春の日々を、かれはいまどんな思いで回想するであろうか。また、韓国といえば、日本植民地時代の朝鮮から富士見ヶ丘の学園にきていた同じ十六回生・金乗権君もソウル市に健在であるが、かれの感懐は

いかがであろうか。

昭和十六年の定期戦では、もうひとつ、かくれたエピソードがある。三年生（十六回生）のM・Rたちは定期戦の写真班で、試合中いつもグラウンドに降りていて、カメラを構え、選手の動きを追ったり、観客たちの熱狂の様子を撮影したりしていた。高商側のスタンドは若い女性のファンが多く、例年、高工側をうらやましがらせていたものであるが、何しろスタンドはグラウンドからだとは、だいぶ高いところにある。だから観客のほうにカメラを構えると、いやでもご婦人がたの下半身がファインダーにとびこんでくる。ところがそのころはまだ、パ

ンティをつけていない人が多かった。当時、女子の場合下ばきはズロースと呼ばれていたが、昭和七年二月の白木屋デパート（現在の東急百貨店日本橋店）の白昼火災のとき、若い女店員が、ズロースをはいていなかったばかりに、脱出用のロープにすがりながら、下にむらがる弥次馬どもの目を気にし、片手を放して着衣のスソをおさえたりしたため、手がゆるんで墜落死するという惨事があった。以来、ズロース着用が一般的な風習になったといわれてきたが、地方都市にこの風習が及ぶまもなく、戦争になり、衣料事情が窮屈になって（十七年の二月から衣料キップ制が実施される）、昔に逆もどりしていたのかもしれない。とにかく、「まる見えなんです。ほかのほうは二のつぎで、強烈にそっちばかり写していました」と、M・Rはいまごろになって、昔の「悪事」を告白している。

6 緒戦の空襲、戦時下最後の定期戦

そんなこともあったが、十六年からすでに、応援団は学校報国団の応援団となっていて、応援の自衛がうたわれ、十七年になると、そういう方針はいっそう強化された。授業に支障を及ぼさないよう、応援練習時間は短縮するということからじまって、定期戦当日市中行進のさいは、プラスバンドは演奏しない、行進歌を合唱しないことになり、入場式のおわりに「海行かば」を合唱させられた。それから両校応援団の申し合わせで、警戒警報、空襲警報が出たときは試合を中止することにし、また、夜の警備が廃止された。定期戦がおわった夜、両校学生が伊勢佐木町あたりでぶつかり合う「夜の定期戦」を、両校の柔道部やラグビー部あたりの腕っぶしの強い連中が「警備」の腕章を巻いて、制止し、ときには、腕章をはずして、いっしょになってやり合ったりしてきたものだが、十七年には時局がら、学生各自の自覚にまつ、ということになったものだ。前年（十六年）あたりまでは「夜の定期戦」も恒例のごとく行なわれ、学帽を奪い合い、奪った帽子をまとめて翌日返しに行く、といった「行事」がくり返されたようだが、もう十七年になると、ピアホールも学生服では入れないという状況だった

から、事実上、夜の警備の必要もあまりなかったであろう。

このようにして昭和十七年の定期戦は、五月三十、三十一日、六月二日の三回戦のうち、高商陣に凱歌があがった。勝利決定の日、夕やみ迫る富士見ヶ丘に帰ってきた高商生たちは、すっかり肩を組み合い、歓喜のストームに酔った。夜空をこがして燃えさかるカガリ火をかこんで、時のたつのも忘れて踊りつづけたのであった。しかし、ちょうどそのころ、ミッドウェー島攻略作戦に出撃したわが国の連合艦隊は、六月五日、米機動部隊の反撃に会って大敗を喫し、これによって、日米海空戦力のバランスは完全に逆転した。破局への道程が、こうしてはじまり、翌十八年の定期戦は中止されて、十七年が戦時下最後の試合となったのである。

十八年も、高商、高工の学生には定期戦継続の気持ち強く、応援団結成も進められたが、文部省は、すでに十七年から「大日本学、徒体育振興会」によって学校体育を統制しており、十八年には、一部同好者による娯楽的意味の強い選手本位の対外試合、とくに對抗定期戦は中止するよう、各学校に通達した。なかでも、野球は、敵性競技であるとして、高圧的に全面中止の命令をくだしたのである。このため高商も、この年に、野球部すなわち学校報国団鍛錬部野球班を解散せざるをえなかった。また、野球以外の運動競技の定期戦も、すべて十七年をもって中止された。このようにして、大正十四年以来、昭和四、五両年の中絶を除き、十六年の長きにわたって毎年あい闘われ、浜の早慶戦として市民の血をわかしてきた野球定期戦は、ここに戦中までの歴史を閉じることになった。再開は、戦後昭和二十一年からのことになる。これまでの対戦成績は、高商の九勝七敗であった。

7 勤労働員、学徒出陣

昭和十六年十一月に「国民勤労働報国協力令」が公布されて、かつての集団勤労働作業ないし勤労働奉仕は「勤労働員」と呼ばれるようになり、十七年、十八年とその日数はしだいにふえていった。十七年の十一月には、高商生は、二日間を農作業の援助に出動、また、十八年三月二十七日から五日間は、長津田（いまの横浜市長津田町）にあった陸軍兵器廠に動員された。「農家の手伝いにいったものは、横浜線沿線の農家に合宿して、稲の刈り入れとか、脱穀とかの作業をやったものです。当時、食糧がだいふ足りなくなっていたが、白米メシをたらふく馳走になって、喜んで帰ってきた記憶がある。また、兵器廠では、手榴弾とか高射砲弾をつくる作業をやらされた。その後、日本冶金の庄延工場にも動員されたが、庄延されて出てきたアルミの、まだ熱いやつを、ノコギリで一定の長さに切るような作業をやらされ、あとで、塩辛いお湯を飲むのがたのしみだった。」十八回生のK.Tはこのような回想している。

7 勤労働員、学徒出陣

さきにも述べたように、昭和十三年の夏からはじめられた集団勤労働作業は、翌十四年には正課に準じて取り扱うことにされ、十五年には、一年のうちの三十日以内の日数を、授業をやめて作業に振り向けるようにされていたが、十六年の開戦以降、若ものたちのあいつぐ出征に伴う国内の労働力不足をアナ埋めするため、国民勤労働報国協力令が発動されたのであった。学徒の場合は、学校報国隊が勤労働員の命令を受けるかたちにとられた。十六年九月、高商でも結成された学校報国隊は、こうして、軍隊の予備軍であると同時に、労働力補充の受けザラとしても利用されたわけである。



実包射撃

十七年のミッドウェー海戦をさかいに、彼我の戦力が逆転し、戦局がいよいよ緊迫化するとともに、十八年には、学徒の勤労動員が、一年のうち三分の一の期間行なうことに延長され、さらに、敗色ますます濃くなった十九年三月には、中等学校以上の学徒の通年動員制、つまり一年を通しての勤労動員が決定、学生たちはぞくぞく軍需工場の作業にかり出されて、同年後半ごろから、授業はほとんど受けられない状況になっていく。同年八月には、国家総動員法に基づく「学徒勤労令」が公布され、学校報国隊の組織による勤労期間を一カ年とし、「勤労即教育」と規定されて、同年三月以降実施されてきた通年動員制が、法令的に確立されることになる。

こうして高商生たちは、十八年から十九年にかけて、主に鶴見、川崎地区の十数工場に分散動員されていた。二年生（二十回生）

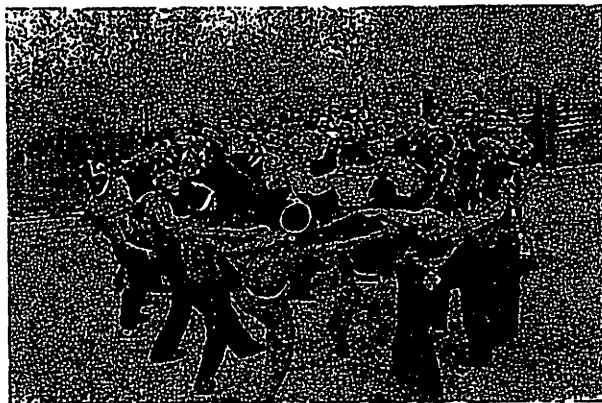
の大半は横須賀の海軍工廠に動員され、艦船に積む機関砲の製造作業をやらされた。くたびれてサボっていると見まわりにきた士官に見つかってぶんなぐられ、ハナ血を出したのもいた。だが、横須賀の女学生が同じ職場に動員されてきていたのがたのしく、そのとき知り合った女学生とのあいだにロマンスの花が咲き、戦後めでたく結婚したものもいる。きびしい戦時下にも、青春の息吹があったことは、せめてもの救いである。

そのころ、学校食堂の主食は、めん類をきざんで米にまぜたものの、のちには豆カスをまぜたものにかわっており、校庭のあちこちが掘り起こされて、イモ畑になっていった。だから、このころから終戦直後の卒業生たちの

思い出話には、必ず食いのことが出てくる。前記の、日本冶金の庄延工場ですすった塩辛いおも湯の話とか、農作業の手伝いで振舞われた銀メシの思い出などが、そのいい例である。勤労動員に着ていく作業服もスフ入りのお粗末なものになり、ヒザがすぐにとび出してしまった。十七年ごろまでつづけられた運動部の活動でも、水泳班の水着の生地はやはりスフ、庭球班では硬球のボールがなくて苦労した。待ちに待ったボールの配給のキップがくると、東京お茶の水にあった配給機関まで、すっこんでいってもらう。さいしょのうちはボールのまわりに毛がついているが、それがすり切れて、ボール全体が小さくなるまで使わなければならなかった。「十七年に、全国テニス連の試合が根岸のコートであったが、そのころ高商生には運動靴がなく、ハダシで、うしろハチ巻きをして試合をやった。外人もきていて、ショートパンツをはき、サングラスをかけた女性もいたが、かれらの目にはさぞかし奇妙にうつったことだろう」と、前記の十八回生K・Tはのちに語っている。

7 勤労動員、学徒出陣

教育に対する国家統制は、ますます強化されていった。十七年度から、入学試験期日は文部省で一定し、実業専門学校と高等学校とを同一日として、しかも一班、二班の別（いまの一期校、二期校の別）を無くしたから、かけ持ちがまったくできなくなった。高商の入学志願者はこの年、大幅な減少をみて、開校以来の最低を記録した。すなわち、中学校出身と商業学校出身とをあわせて、七六一名と、最高年度のざっと半分に落ち、一方、前年の十六年から一学年の定員が増加されて、四クラス編成、二百名余りとなっていたから、入試倍率も、三・七強と、開校以来の最低を示したのである。翌十八年からは、入学試験いっさいを文部省が統制し、試験期日は、再び高等学校と専門学校とが別々の日にわけられたから、高商の受験者数も前年のほぼ二倍に復帰したが、試験問題はすべて、文部省が作成出題するという中央集権化ぶりとなった。



出陣学徒かこんで嵐上ストーム

カリキュラムも、十七年度から、英語と第二外国語の授業時数が大きく削減されて、体育と教練が一段と重視された。またこの年から、卒業期が半年くり上げられて九月卒業になったから、短縮分の授業が二年半にふりわけられて、一日の授業時間が延長され、休暇も短くされた。これまで五十日余りあった夏休みは、十七年には、七月二十二日から八月十日までの約三週間にけずられてしまった。しかもその間に、約一週間は箱根報國寮での勤労作業にかり出され、春の学年休みも、十八年の三月下旬には、前記のように、陸軍兵器廠への勤労動員が待っていた。学生たちにはもはや、キャンパス・ライフをのびのびとエンジョイできた戦前の先輩の話は、夢物語となっていたのである。

卒業生の就職先も、十八年ごろには、八割が軍需工場、残り二割が銀行、商社と機がわりしていた。民需部門の工場も軍需に転換され、入営が待っていて、卒業することは、すなわち軍服を着ることを意味した。すでに十六年の十一月に、文科系学生の徴兵猶予期間が一年短縮され、期限の切れたものは、在学中でも徴兵検査を受けて軍隊に入らねばならなかったが、戦局いよいよ急を告げた十八年九月には、文科系学生の徴兵延期が全面的に停止された。徴兵適齢（満二十歳）に達していた学生たちは、その年十二月一日、いっせいに軍隊の門に入ってしまった。世にいう学徒出陣である。これより先き、東京では、十月二十一日、これら

の学徒たちが、神宮外苑競技場で催された出陣学徒壮行会に参加、東条英機首相の見まもる前を、陸統と分列行進して、入営のため故郷に旅立っていった。

高商でもその十一月、出陣学徒壮行式が挙行された。そのあと若ものたちは本館屋上にのぼって、ストームを催し、軍隊に旅立つ学友たちを内側にかこんで、しっかりと肩を組み合い、ともにうたい、ともに踊りながら、別れを惜しんだ。その学友たちの何人かは、再び学園に帰ることがなかった。

8 田尻校長から岡野校長へ、横浜工業経営専門学校

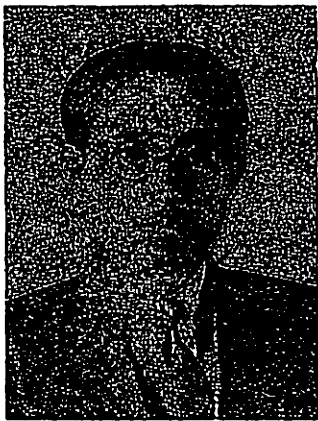
昭和十七年春ごろのある日、田尻常雄校長は、学校事務局の高林義雄庶務課長を校長室に呼び、「私も近く校長をやめたい。ついては、これは君だけに相談するのだから……」と前置きして、後任校長について高林の意見をたずねた。高林は「いま満洲国にいる岡野鑑記さんはどうでしょうか。岡野さんなら、創立以来十四年も本校におられた人で、本校の伝統も、教育理念もよく知っておられるし、軍との関係もうまくやっていると認めます」と答えた。田尻校長は、「じつは私もそう思っていたのだ。実現するのは相当さきのことだから、このことは君ひとつのハラにしまっておけ」といわれた（神奈川大学経済学会『商経論壇』一九六六年六月、岡野鑑記博士追記番号、高林義雄「誤解を解く」から）。岡野校長が実現したのは、それから一年有余のちである。

大正デモクラシーの影響下に育った田尻常雄は、根っからの自由主義者であったが、老齢の加わるのに反比例して軍国主義化がますますきびしくなる時世になってきたので、いちばん側近にあった高林からみても、ほとんど困惑し疲労の極子がありありと見うけられた。田尻は十七年の九月に正三位勲一等の叙勲を受けて、高専校の



「横浜工業経営専」帽章

も、二月にスターリングラードのドイツ軍が降伏、九月にはイタリアが連合軍に無条件降伏して、日独伊枢軸側の最後の日がしだいに近づいていた。このときにあたり、十九年四月、政府は「教育に関する非常措置」をとり、大学は基礎、応用科学の研究に従うのに対して、専門学校は、工場において直接生産に役立つ人材を養成するという方針を打ち出し、同年度から、専門学校のカリキュラムの全面改正を行なうとともに、学校そのものの名称も変更させたのである。高商が工業経営専門学校となると



岡野校長

戦局ますますけわしい時局下の校長の任は、ご本人にも重荷とみられていた。もうひとり、のちに國大の初代経済学部長となる経済史担当の徳増栄太郎教授だった。これも徹底した自由主義者で、当時の時世では文部省あたりから、左翼思想の持ち主とにらまれ、田尻校長は非公式に文部省当局の意向を打診したこともあったようだが、とうてい承認される形勢ではなかった。

こうして、岡野鑑記教授に白羽の矢が立った。岡野は、高商創立以来教授として財政学、植民政策を講じ、昭和八年から数年間は生徒主事もつとめていたが、昭和十四年一月付で、関東軍に招かれて経済顧問となり、かつ、そのころ満州にできていた建国大学教授を兼ねるため、転任していった。その岡野のもとに、昭和十八年の夏ごろ、田尻校長から突然一通の親展書簡が届いた。後任校長を引き受けてほしいという内容であった。岡野は大陸に骨を埋めるつもりで、すでに住居も満州に移していたし、高商には先登教授も多数いるので、固くこれを辞退した。しかし、その後も再三懇請を受け、しまいには、説得のために、田尻校長の代理として斎藤照之助会計課長を新京（いまの長春）に派遣するという、最後通牒にもひとしい田尻からの手紙が届いた（『昭三会々報』第三号、

岡野鑑記「大戦時下の学校工場」による）。このあたりは、年をとっても、壮年のころ文部省を相手にとって、白壁の殿堂」の建設に見せた押しとねばりが、あいかわらずの田尻校長であった。岡野はとうとう陥落させられ、十八年の十一月横浜に帰ってきた。横浜駅に下車したときの心境は「戦士が、敗戦のせまった苦難の戦場にとびこんできたような悲痛な心境だった」と、のちに記している（前掲『昭三会々報』）。

こうして、十八年十一月十一日、新旧校長送迎式が挙行され、田尻校長から岡野校長へのバトン・タッチが行なわれた。それからまもなく、十六年度から一学年四クラス編成となっていた各クラスは、それぞれ「忠」「勇」「武」組と呼ばれるようになり、学園は、岡野校長好みのスパルタ式教育の色合いがしだいに濃くなっていく。富士見寮も「養生塾」と改められ、寮生に軍隊式の規律が課された。しかも、十九年四月からは、軍部と文部省の圧力で、田尻校長時代から内定していたことだったが、学校自体が「横浜工業経営専門学校」に改称させられるにいたったのである。昭和四年四月以来付設されてきた貿易別科も、このとき廃止された。

すでに戦局は、十八年の二月に日本軍がガダルカナル島を撤退、四月には、連合艦隊司令長官の山本五十六大

校長としては最高のランクとなり、従三位勲一等だった時の文部大臣橋田邦彦より、宮中序列は上をいくかたちになっていた。また、高商は十八年に創立二十周年を迎えることになっていたの、そうした機会をひとつの区切りとして、引退を決意したもののようである。後任校長には学内に二人の候補者があった。ひとりは、経済地理担当の下田礼佐教授で、長らく生徒主事や学報部長をつとめ、田尻校長の信任も厚かったが、何せ年齢がすでに六十近く、

同時に、高工もこのとき「横浜工業専門学校」に改称させられている。

このようにして、十九年四月に高商に入学した一年生は、横浜工業経営専に入学したことになり、二、三年生が属している旧来の高商は「横浜経済専門学校」、略称・横浜経専という校名になった。しかも、横浜工業経営専は前記のように軍国主義の生んだ奇形見だったので、敗戦後の二十一年三月には廃止され横浜経専に統合されたから、あくまでも戦争末期の、まぼろしの学校におわっている。したがって、十九年春と翌二十年春に工業経営専に入学した学生たちは、それぞれ戦後二十二年、三年の春に、こんどは経専(高商)の二十一、二回生として卒業するという、他の回にはない珍しい経験をするようになった。YCCの記章のついた学帽をかぶっている経専の学生とちがって、二年つづいた工業経営専の学生たちは、ドイツの空軍士官を思わせるような、鳩が両の羽を開いた下に、桜の花びらの形をかたどって、中に「工経」の文字を白く浮かした、布製の帽章をつけていたから、これらの学生たちにとっては、まぼろしの学校はやはり現実の学校でもあった。ちなみにこの「工業経営専」の帽章図案は、当時高工の造船科に在学中だった英語の伊東弥教授の「子息伊東祐一氏の図案によるものである。そうした珍しい「工経」の在学生のひとりで、のちに国大の教授となる二十一回生のU・Aは、当時をつぎのように回顧している。

「私たちは、横浜高商の後身、工業経営専門学校に入学したわけだが、入ってみてあまりにもそれが工業的色彩の濃いのにはビックリした。だんだん授業を受けるにつれて、いったいこの学校は理料系統なのか、それとも経済系統なのかかわからないということで、悩んだ人たさも多いようだった。このような空気を察しられてか、岡野校長は、本校は経済と技術の両面の知識を兼備した、工業のマネージャを養成するところである、と学生たちに強調されたが、本気でそのように思ったものはあまりいなかった」(『高丘会報』第二十五号、高商二十一

回・宇田川孝仁「動乱の私の学生時代」から。

YCCの記章をつけた二、三年生と、たしかにその人たちの後輩ではあるけれども、別の鳩の記章をつけ、また、授業内容もかなりちがった新一年生とかなる学園の生活が、このようにしてはじまった。授業は十九年の秋ごろまでは、何とか開かれていた。その内容は、工業経営という、経済と工業のあいの子のようなものや、英語、経済概論や簿記もあれば、電気や電気実験、簡単な機械工学もあったといった風だった。U・Aたちは、はじめずいぶん面くらったけれども、学生のほうで勝手に経済学系統を主にやればいいんだ、ときめてしまつて、理料系の授業は軽くなったのしんだだけだった。講師にきていた高工の教官たちも、お前たちシロウトに何がわかるかといわぬばかりに、笑いながら講義をする、というぐあいだった(前掲「動乱の私の学生時代」による)。

戦時中の学制改革で、そのころ、専門学校も中学四年修了で入学できるようになっており、U・Aもそうしたひとりだったので、当時まだ満十七歳になっていなかったが、柔・剣道、教練、戦陣訓などを通じて、軍国教育は中学校ですでにたっぷり受けてきていた。それでも、工業経営専の徹底したミリタリズムには、度胆を抜かれた。前記のように、四組あった各クラスは、それぞれ忠、誠、勇、武と名づけられ、級長は挺身隊員と呼ばれて、胸に「挺」のマークをつけていた。また、東京および横浜出身以外のものは、入学早々、富士見寮改め「整正塾」に入寮させられた。塾長は岡野校長、塾監は戦前から寮監だった哲学の宮成喜馬平教授、学生の定員増(二クラス増加)で十七年度から着任した英語の沢崎九三教授、それから井上チヨンス教官の三人で、交替で塾に寝泊りしていた。塾生は十名ぐらいうずつの八班にわけられ、班長は二年生があたった。

整正塾の日常は、毎朝食前に、廊下のソウキンがけ、庭での点呼、それがすむと、木刀を振りまわす訓練や学校の周囲一周のマラソンがあり、夜は、就寝前の点呼があつて、まったく塾の名前にふさわしかった。それでも、

若ものたちの集まりらしい愉快なことが多く、初恋の何とかいう、甘いメロディをうたうものがあるかと思えば、一方では、右翼の「昭和維新のうた」を高唱するものもいた。夜は、沢崎教官の指導でトランプ遊びが塾内にはやり、隣室のものたちが集まっては、毎晩のようにやっていた。富成教授は哲学同好会を指導し、岡倉天心の『茶の本』の読書会などを行った。

授業のあいだにたびたび勤労動員を受けた。十九年の春からすでに、学徒の通年制勤労動員がはじまっていたのだ。杉田の奥の山中で、丸太運びの人足仕事をやったこともある。山の中の細い流れの中に足をぬらしながら、丸太を道路まで引きずりおろす作業だったが、ノルマを果たすまで、現場の親方が帰してくれなかった。学生たちの労働力の支配権は、動員先きが完全に握っていたのである。また、横浜市内での、食糧（といっても豆カスが多かったが）配給作業にかり出されたこともある。市電通りを数人ひと組になって、大八車をガラガラと、倉庫から倉庫へ引っ張り歩いた。養生養生はみんな、倉庫でひろった米を弁当箱いっぱい詰めて持ち帰り、それぞれの室で自炊して、塾の食事では足りない栄養を補給した。夕方、どの室の窓からも、メシをたく煙が立ちのぼるのが壮観だった。塾生にとって、労働はさほど苦痛ではなかったが、空腹にたえることは辛かった（以上、前掲「騒乱の私の学生時代」による）。

このころになると、英語の西村綱、光井武八郎、河村重治郎の各教授や、スペイン語の岡田峻助教授、それに下田礼佐、岩本啓治、小幡孫二、井上龜三の古参教授たちが、あいづいで富士見ヶ丘の学園を去っていった。学園の軍国主義化とあわせて、これらの教官の人事についても、戦後、岡野校長を非難する声が聞かれたが、文部省を通じてたえず軍部の圧力が加わっていた当時の情勢を考えれば、岡野校長のみを責めることは、当を失しているというべきであろう。この点につき、当時庶務課長だった高林義雄は、前掲の「誤解を解く」と題する手記

のなかで、つぎのように述べている。

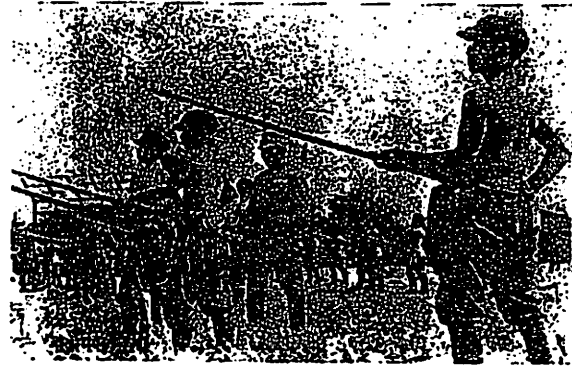
「横浜高商が横浜工業経営専門学校と改称されたのは、軍と文部省の要求で、田尻校長と幹部教職員との協議のうえでやむなく定めたもので、岡野先生の前任前にすでに決定済みであった。また軍は英語を敵性語として排斥し、その時間数を著しく減じたので、やむなく英語の長老教授たちに勇退してもらったのである。岩本、

下田両教授は岡野先生着任前にすでに退職し、井上、小幡両教授は自ら退職されたのであった。」（前掲、神奈川大学経済学会『商経論叢』岡野鑑記博士古稀記念号）

9 学校工場秘話

昭和十九年になると、戦局は格段に悪化していった。同年二月、米軍はマーシャル群島に上陸、さらに六月にはサイパン島に上陸して、同島にいた日本人は、軍隊ばかりか婦女子も含めて『全員玉砕』の悲劇があったあと、七月に同島は陥落、ここを基地とした米空軍B29機による日本本土空襲が、十一月から連続的に開始されることになる。

こうしたなかで、富士見ヶ丘の高商体育館は、同年九月「東芝清水ヶ丘工場」に転換、同月七日にその開所式が行なわれた。いわゆる「学校工場」の誕生である。高商創立後もない昭和二年三月、東京高師を出たての若き下津屋俊夫助教（当時）の情熱をこめたデザインをもとに完成、以来、近代体操に必要な器具のほとんど全部をそろえて、高専工随一の施設を誇ってきた体育館であった。それはまた、昭和七年、ロスアンゼルスで開かれた第十回オリンピック大会に、日本体操チームの総監督として出場して以来の、下津屋の精力的な活動とあいま



戦う学図

「私たちは近代兵器のメカニズムをまったく理解することなしに、ただ命じられたとおりにハンダづけをし、ネジを締め、塗装をした。ボルトだ、ナットだ、コンデンサーだ、端子だと、部品と道具の使いかたは

二十一回生U・Aは次のように記している。

「私たちは近代兵器のメカニズムをまったく理解することなしに、ただ命じられたとおりにハンダづけをし、ネジを締め、塗装をした。ボルトだ、ナットだ、コンデンサーだ、端子だと、部品と道具の使いかたは

出征した。(中略)かつて経済力からみたアメリカの戦力調査に参加した私は、内心では、もはや勝利を信じることはできなくなっていた。だから戦後の日本経済の再建を担当する生徒たちを、このさい少しでも多く教育しておくことのほうが、私にとっての急務だと考えた。その方法として採用した最後の手段が、学校工場の建設だったのである。」(前掲『昭和三十九年』第三号、岡野健記「大戦時下の学校工場」)

このために岡野校長は、学校工場に必要な動員生徒数を、実際の二倍に水増しする離れわざをやっていた。バレれば、国民動労報国協力令などの違反できびしい処罰を受けなければならない。「私は全校生徒を、多数の

動員工場から全部引き揚げて、学校工場だけの作業配置計画を立ててみたところ、だいたい予定どおり、動員生徒数は約半数で足りたのである。

そこで全校生徒を二分して午前と午後の二交替制をとり、半日ずつを授業時間にあてた。空襲下では落ちついて授業はできなかったが、それでも私の計画は図にあたったのである。」(前掲「大戦時下の学校工場」から)

平時のキャンパス・ライフのパターンがまったく破壊されてしまったいた時だけに、この計画によって幾分でも回復された学生間のコミュニケーションは、たしかに若ものたちに喜びを与えたようである。前記の

って、わが国近代体操のひとつのメッカともなってきた施設であった。その体育館に、配線が張りめぐらされ、施設が据えつけられ、その他の付属機械器具が運び込まれて、潜水艦に積むリーダーの製造工場に早がわりしたのである。ここでつくられたリーダーが、台湾沖でいち早く敵の所在を発見して、軍から感謝状をもらったこともある。

この学校工場の計画は、これより数カ月まえから立てられていた。のちに国大の経済学部長、学長となる会計学担当の黒沢清教授が、東芝との交渉に奔走し、まず三年生(十九回生)を中心に学生が、東芝の柳町工場に動員された。リーダー生産の各過程を習得するためである。「われわれは東芝柳町工場の、リーダー生産に関連する各部門に配属された。その仕事を覚えてくる、みんなが覚えてきたことを集めると、小型の工場ができる、こうして、体育館の学校工場ができあがったのです。工場の伝票システムも、東芝の伝票をもらってきて実行し、製品の調整試験まで全部やって出荷した」(十九回生M・Gの語)。つまり、リーダーを組み立て製造して、出荷するまでの工場経営管理全体を、学生だけの手でやっていたわけだ。工業経営専門学校(正確には、当時の一年生だけがその学生だったわけだが)にとっては、当時としては、まことに打ってつけの実習になったわけである。しかも、この計画には、各地の軍需工場に分散動員されている学生を母校に集め、教官と学生、あるいは学生同士のコミュニケーションが密接に保てるようにするとともに、作業のあい間にはできるだけ授業を受けさせたいという、学校当局者のねがいがこめられていた。岡野校長自身が戦後記したものによって、そのねらいをきいてみることにしよう。

「十九年になると、戦局は悪化の一途をたどり、全校生徒たちは、生徒通年動員で十数工場に分散配置された。教職員たちも、動員生徒を指導監督するために、各工場を巡回した。上級生の多数は、徴兵されてつぎつぎに



防衛マスタつけて

やたらに覚えた。しかし、入学以来はじめて上級生と親しく接し、いろいろおしゃべりができるということはたのしかった。生まじめな上級生もいたし、Y談の上手な上級生もいた。私がタバコの味をはじめて知ったのも、このような雰囲気の中であった。」(前掲「動乱の私の学生時代」から) しかし、学生たちにとっても、また教職員たちにも、苦難の日々であったことにはかわりがない。学校工場は、前記の黒沢教授と簿記担当の沼田嘉穂教授、それから高林庶務課長の三人が管理主任として、監督にあたっていたが、学校構内の官舎に住んでいた高林は、やがて訪れてきた戦争末期の冬、朝の七時に霜を踏んで学校工場に出勤、軍隊式の朝礼をすませ、手先きがここえてなかなか就業しない学生たちに、ただひとりグラウンドを数周かけ足をするによって、無言の激励を行なう日常だった(「富丘会報」第十二号、高林義雄「留聲」による)。

ところが昭和二十年の三月、学校工場の監督官庁だった海軍省から、実地調査のため査閲官が派遣されてきた。とうとう来るものがきたな、と岡野校長が待っていると、査閲官として校長室に入ってきた海軍主計大尉は、驚いたことに、高商十三回卒業生のMであった。戦時下のきびしい軍律のもとだから、師弟の情などは心に移めて旧体育館の工場を案内すると、そのときは、全校学生を全部そこに配置しておいたから、労働過剰は一目瞭然だった。査閲を終えて校長室にもどったM大尉は「労働配置にこまかしがありますね」と質問してきた。観念した岡野校長は、事情をありのままに説明した。そして、「君が、異状なし」と虚偽の報告をして、あとで露見すれば君の処罰は免れないし、私が、学務職員を計画的にこまかしていると、君が正直に報告すれば、私の処罰は必

至である。しかし、私は信念をもってやっていることだから、どんな処罰でも甘んじて受けるつもりだ。師弟の情などにとらわれずに、君の冷静な判断で処理してほしい」という意味のことを述べた。

それから岡野校長にとっては、覚悟はしていたものの、不安な毎日がつづいたが、何ともなく二カ月余りが経過した。M大尉がおそらく、自分の処罰を覚悟で「異状なし」の報告してくれたのだらうと、安堵がよみがえってきた。その矢先きである。その年四月十五日の夜半、横浜上空に来襲したB29の一編隊は富士見ヶ丘の学園をも襲い、問題の体育館・学校工場も、一夜にして灰燼に帰したのである(前掲「大戦時下の学校工場」による)。

10 横浜大空襲、あゝ広島

サイパン島を落として空軍基地を得た米軍は、昭和十九年の十一月から、B29機による日本本土への本格的な空襲を開始した。京浜工業地帯はそのたびに被害を受けた。「空襲警報発令、空襲警報発令、相模湾より進入せる敵機の編隊は北上して……」とラジオが報じ、あのうなるようなサイレンがひびきわたるたびに横浜、川崎方面に火の手があがったものである。二十年に入ると、三月に、東京下町方面の大空襲があり、横浜は四月十五日、五月二十九日、八月十二日の被害がもつとも甚大だった。とくに、富士見ヶ丘の学園は、四月十五日および五月二十九日の両度の空襲で、木造部分を中心に施設の約四割を焼失するという、大きな被害を受けた。

そのころ、釜正塾(富士見塾)の塾生たちは、空襲警報のサイレンがなるたびに、防空作業の身支度をして、塾の庭に待機した。そんな夜が、毎日のようにつづいた。あの丘の上からは、鶴見方面の空が赤々と燃え、サーチ・ライトが上空を横切り、その光に照らし出されるB29の姿がはっきりと見えた。高射砲が発射されるたびに、

夜空に光の点線が描かれ、それは悲絶の一語につけるシーンだった。こうして、四月十五日の夜がやってきた。午後十一時半ごろ空襲警報が発令されて、二年生になっていた前記のU・Aは、数人の塾生といっしょに、本館屋上の監視哨に配置されていた。西の方から、B 29の一編隊が真正面に近づくのが望まれた。この編隊が、およそ四十五度の角度にせまったとき、夜空にチラと火の玉がこぼれ落ちるのが見えた。「爆弾だー」と直感した。ころげるようにして本館内の階段を駆けおりたが、一階に行き着くまでに、ズドンというものすごい音をきいた。編隊の去ったと思われるころ、庭に出たU・Aたちは、体育館・学校工場が紅蓮の炎につつまれているのを見た。もう手の施しようもなかった。そればかりでなく、庭からとびこんだ焼夷弾で、本館二階の教務課の室にも火煙があがっていた(前掲「動乱の私の学生時代」から)。

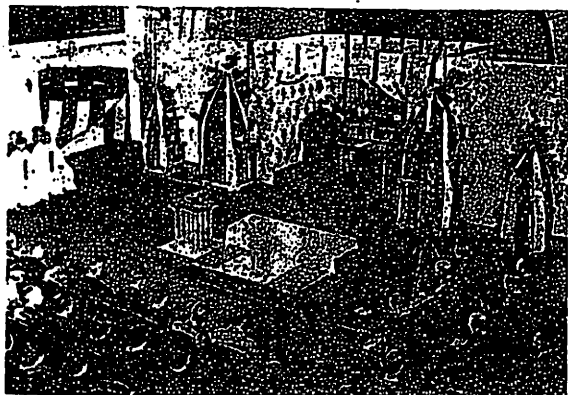
その夜、学校正門に沿った構内の官舎に住んでいた高林庶務課長は、夜半近く、警戒警報から空襲警報になるのをきいて、家族を防空こうに避難させ、あたりを見まわっていた。正門まえの桜並木も、もうすっかり花が散ってしまったな、と思いながら見やるまもなく、ザザーッという音がきこえて、頭上にせまったB 29の編隊から油脂焼夷弾が雨あられと落下しはじめた。あわてて、防空こうにとびこむ。間一髪の差で、高林の住んでいた官舎に火の手あがるのが見えた。みるみるほのおにつつまれていく。昭和五年の夏から十五年間住みなれたわが家であったが、洋服一着、本一冊取り出すまもなく、家財道具いっさいが、目のまえに焼け落ちていく。油脂のほのおは桜の枝々にも燃え移って、まるで花が満開のように見えた。しかし、高林には、そんな感慨にひたっているひまはない。庶務課長には緊急の場合、御真影(各学校に配付されていた天皇の写真)を安全な場所に移す責務が課されているのだ。B 29が引き揚げた様子を見ますや否や、かれは防空こうをとび出した。しかし、正門玄関から本館に入ることはできない。かれの官舎と門衛所の燃えさかる火焰が、玄関のほうに吹きつけているから

だ。かれは左手にまわって学生控所のほうから入ろうとした。しかし、その控所と学生食堂の建物も燃えあがっていた。火勢の衰えを待つしかない。万一の場合は責任をとればよい、とかれは顧念した(高林義雄談による)。

そのころ、本館内にいたU・Aらの養正塾生は、塾監・沢崎教授の指揮のもとに、二階教務課の消火活動を開始していた。やがて、高林庶務課長もかけつけてきた。消火器はひとつしかない。バケツ・リレーで水を運んだ。何時間かのち、ようやく火は消えた。そのときはもう、悪夢のような夜はしらじらと明けかかっていた。校庭のほうを見ると、アメのように曲がった鉄骨の残がいをさらして、無慚に焼け落ちた体育館・学校工場と、雨後のタケノコのように地面いっばいに突きささった焼夷弾とで、さながら戦場のようなであった(前掲「動乱の私の学生時代」から)。こうして、この夜、学園は、体育館、学生控所・食堂、柔・剣道場、官舎の一部、門衛所を焼失した。

学校工場を失って、学生たちは再びちりちりに動員先きになった。自宅からの通学生は、川崎の東芝工場に集められた。徴兵適齢期の入営や、前年からできていた陸軍の甲種特別幹部候補生への志願などで、ますます数が少なくなっていた養正塾生は、東神奈川の港の岸壁で、石炭カスの山から、まだ燃えそうな石炭をえりわけ作業にかり出された。ブラブラさけていくとメシが箱の半分に寄ってしまうような、軽い弁当箱をフロ敷につつま、汚れたカーキ色の服にゲートル、地下タビという格好で、塾生たちは、沢崎塾監に引率され、その作業場にかよった。思えばあわれな学生生活だった。

五月二十九日はサツキ晴れだった。朝のひと仕事をおえて休憩していた午前九時ごろ、空襲警報のサイレンがなりだした。午前中に空襲とは妙だな、と思ったりしていると、やがて、B 29五百機以上、P 51百機以上の大編隊が頭上にやってきた。ザザーッとのすごい夕立のような音をたてて、無数の焼夷弾が降ってくる。あたりは



犠牲者慰霊祭

井ノ口に疎開した砲部隊に、そこから通動していた。八月五日は、越村主計中尉に与えられた月に二回目の公休日だったが、折あしく食中毒を起こして三十九度ぐらいの熱が出たため、下宿の二階の部屋で一日中ふせていた。そして運命の六日の朝が明けた。

熱はまだ下がらない。食中毒の症状が全身のはれもまだ引かなかったが、部隊のカネを預かり、自分の印鑑ひとつで出し入れをしている主計官の身では、休むわけにはいかない。ふくれあがったひざの関節が長靴の胸にあたるのを苦にしながら、下宿を出たのが朝の七時二十分ごろ。広島電車で、八キロほど離れた井ノ口の部隊に着き、ひと息入れたと思うまもない八時十五分、いきなりパッとマグネシウムをたいたような白光が部屋の中までひらめき、一瞬間置いて、ドーンという炸裂音とともにものすごい爆風が起こった。柱時計や棚の上のラジオが吹きとばされ、越村主計中尉も、机と机のあいだに身を伏せていた。

屋敷く、部隊のある山腹から広島街道に降りてみた光景は、地獄絵図そのままであった。広島からの避難民が三々五々、そろそろと歩いてくる。男も女も、シャツや簡単服を吹きとばされて、ほとんどまるハダカだ。婦人の長髪は、パーマネントをかけたようにサラ立ち、肌は血潮と黒煙にまみれてねずみ色になり、全身はやけどで、厚さ三センチ以上もはれあがって、一面にジャガイモをくっつけたように見える。わきの下の火ぶくれが痛いので両手をあげた

ほのおがうずを巻き、熱風にトタン板が吹きとばされている。U・Aたち塾生は、ちりちりになって逃げまどったが、結局はまた、岸壁に追いつめられてしまった。そのうち、だれからともなく、この岸壁には火薬倉庫があつて危い、というウワサが流れ、U・Aたち二、三の塾生は、一般市民にまじって、そのへんにつながれていた小船に乗りこんだ。やがて陸軍の上陸用舟艇が、その小船を港の中に引いていってくれた。空一面を黒煙がおおい、夕方のようにうすぐらい。海面は荒れ、ブイが不気味にゆれている。そうしてU・Aたちは海上にあって数時間、横浜の街が焼かれていくのを、呆然と眺める以外にすべはなかった。

やがて、全市が焼け落ち、空が明るくなってきた。U・Aたちは船からあがり、富士見ヶ丘まで歩いて帰った。街中いたるところ、まだくすぶりつづけている。家の下敷きになって、茶褐色に焼けこげた死体も数知れず見た。電柱はまっ黒い炭のようになって、いまにも倒れそうにゆれている。学校は、本館を残していっさい灰になっていた。楚正塾も、あとかたもなく焼け落ちていた。塾生たちは罹災証明書をもらって、全員郷里に帰った（以上前掲「動乱の私の学生時代」による）。この日の空襲はかつてない大規模のものであり、横浜全市は、大正十二年の大震災の再現を思わせる、惨澹たる被害を受けたのであった。

このときすでに、米軍は沖縄に上陸、ヨーロッパでは五月はじめドイツ軍が降伏して、日本は孤立無援の状態にあった。やがて、八月六日には広島に原子爆弾が投下される。そのころ、母校の越村信三郎教授は再度の召集を受けて、広島郊外にあり、この有史以来の大惨劇をまのあたりにしたのであった。

同教授は昭和二十年の一月、前回の出征から五年目で再度の召集を受け、砲部隊（陸軍砲部隊）司令部付の主計中尉として広島に赴任したのが、同年三月のことであった。広島市内の耳鼻咽喉科の医院——といっても、その家の主人も軍医少尉で応召、南方海上で戦死していた——に下宿し、七月ごろからは、広島市郊外広島沿線の

第4章のための資料

昭和16年					昭和15年				
10・6	9・25	6・15	4・15	4・23	12・14	11・30	10・30	7・11	7・11
本校一学級増設、一学年定員二〇〇名となる 『南方共栄園資料目録』第一輯を刊行 『太平洋産業研究叢書』第一・第二輯刊行 学校報国隊編成される 紀元二六〇〇年記念文庫開設					夏季勤労作業開始 第二回興亜青年勤労報国隊学生隊五名を大陸に派遣 田尻校長・光井教授、教育功勞者として表彰される 学友会を解散、学校報国隊結成される 文部省の総合視察行なわれ、関口実業事務局長、増地・大畑両督学官ら来校 各務財団の援助を得、本校教官により太平洋貿易研究所設立				
6・22	4・13	4・1	3・7	2・19	1・1	1・8	9・27	8・17	8・17
独ソ開戦 日ソ中立条約成立 東京以下六大都市に米穀配給通帳制実施（大人一日二合五勺） 生活必需品統制令公布、国民学校令実施 国防保安令公布 言論・出版・集会結社等臨時取締令公布 戦陣出陣、食糧増産運動に青少年学徒給勤員を過疎 ニュース・文化映画を全国で強制上映					フランス、ドイツに降伏 新体制運動起こる 奢侈品製造販売制限規則実施（七・七禁令） 各政党・労働組合解散、第二次近衛内閣成立 内務省、左翼関係出版物を一せいで禁に、生活綴り方運動も弾圧 国民精神総動員本部、冠婚葬祭の新様式を決定 日独伊三国同盟調印 大政翼賛会発足 ダンスホール閉鎖される 大日本産業報国会創立				

昭和14年					昭和14年				
4・25	3・25	3・25	1・25	1・25	7・17	7・11	7・9	5・22	4・22
本校出身戦没者合同慰霊祭を挙行 紀元二六〇〇年記念事業として選手松山山地内に報国林造営の勤勞奉仕 日米学生会議に学生代表出席 第二次学科課程改正実施、授業時間数一週三時間とす					井上鑑三教授（経済原論担当）逝去 陸軍現役将校配属令十五周年記念の官城前広場観閲式に生徒代表一〇名参加 前年度につづき集団勤労作業開始 興亜青年勤労報国隊学生隊員として生徒五名渡瀧 『横浜高商学報』第百号記念号を発行				
6・12	3・8	3・7	2・10	2・9	9・1	9・1	8・21	7・15	6・11
汪兆銘政権樹立 六大都市で砂糖・マッチのキップ制実施 鐵道製品配給統制規則公布 マッチの製造配給統制はじまる 衆議院、反軍演説で斎藤隆夫を除名 早大教授津田左右吉博士、出版法違反で起訴される 平沼内閣「欧州情勢複雑怪奇」と声明、辞職（28日）、阿部内閣内閣成立 ドイツ、ポーランド侵入、第二次大戦勃発 九・一八価格停止令公布（ヤミ価格時代はじまる） 米、日米通商条約廃棄 独ソ不可侵条約締結 国民徴用令（白紙で徴用）実施 ノモンハン事件起こる パーマネット廃止される 米穀配給統制法公布（10月1日実施） 賃金統制令実施 ドイツ、チエコスロバキアを併合					ドイツ、チエコスロバキアを併合 賃金統制令実施 米穀配給統制法公布（10月1日実施） ノモンハン事件起こる パーマネット廃止される 国民徴用令（白紙で徴用）実施 米、日米通商条約廃棄 独ソ不可侵条約締結 平沼内閣「欧州情勢複雑怪奇」と声明、辞職（28日）、阿部内閣内閣成立 ドイツ、ポーランド侵入、第二次大戦勃発 九・一八価格停止令公布（ヤミ価格時代はじまる） 米、日米通商条約廃棄 独ソ不可侵条約締結 国民徴用令（白紙で徴用）実施 ノモンハン事件起こる パーマネット廃止される 米穀配給統制法公布（10月1日実施） 賃金統制令実施 ドイツ、チエコスロバキアを併合				

第4章のための資料

昭和18年														
11・25	10・30	9・	9・	7・	5・	3・27	3・19	3・	3・5	1・	1・20	12・	11・25	9・16
出陣学徒の壮行式挙行														
たは修了年限の昭和十九年度臨時短縮に関する件公布														
文部省令第八十号をもって、大学学部等の在学年限ま														
田尻常雄校長が退職、岡野鑑記氏が第二代校長に就任														
海軍航空隊に本校生徒二名が採用さる														
本科第十八回卒業式を挙行、卒業生一八九名														
夏季休暇に合宿訓練実施														
創立二十周年記念式典挙行														
『横浜高等商業学校二十年史』刊行														
場、校内防空壕の作業などに従事														
集団勤務作業、陸軍兵器廠、超国林植林、総合運動														
実戦的防空演習実施														
も同一とす														
入試問題文部省で統一出題、実業専門学校の入試期日														
『太平洋産業研究叢書』第七冊刊行														
教室の暖房を廃止し、全校移けての集中体育訓練実施														
ち出される														
勅令第三十九号で専門学校令改正され、超国家主義打														
学力低下の防止をはかり三分科制実施さる														
くり上げ卒業対策として十二月中に学年末試験を実施														
授として赴任、出発														
渡辺輝一教授、現職のまま二カ年間仏印の南方学院教														
本校第十七回卒業式挙行、卒業生一七八名														
11・13	10・26	9・23	9・22	7・	5・	4・18	2・	1・13	12・4	11・7	米英軍北アフリカ上陸			
英語を使った雑駁名は改題となる														
内務省、ジャズレコードを禁止														
ガダルカナル島撤退、スターリンググラードの														
独軍降伏														
山本五十六連合艦隊司令長官戦死														
米軍アッツ島上陸														
伊、ムッソリーニ失脚、パドリオ内閣成立														
イタリア無条件降伏														
女子挺身隊、二十五歳未満の未婚女子動員さる														
理工系以外の学徒徴兵總予制撤廃さる														
中野正剛刺殺自殺														
東京の疎開計画さる														

昭和 17 年											昭和 16 年				年			
9・15	9・8	7・	7・	5・12	4・	4・	3・3122	3・	2・18	2・13	1・	12・27	12・24	11・12	11・	10・	10・7	月・日
同校長が満州国建国十周年記念式典に参列 田尻校長勲二等に叙せらる 黒沢清教授、南方へ出張 夏季休暇を短縮、夏季訓練期間として実施 助教七名に改正さる 勅令第四百九十二号により本校職員定員が教授二名、 ゼミナールを演習と改称 マレー語科新設さる 本校報国隊に初の勤務協力令下り、海軍工廠に出勤 卒業くり上げに伴う臨時学科課程決定 シンガポール随務視察式挙行 『太平洋産業研究叢書』第五・第六冊刊行 臨時補習科規則を制定											賀陽宮殿下、軍事教練視察のため来校 本科第十六回卒業式（三カ月くり上げ）挙行 『太平洋産業研究叢書』第四輯刊行 体力競技大会実施 回は九月卒業と決定（11月1日）				本校 関 連 事 項			
9・12	8・7	6・5	5・20	4・18	2・15	1・2	12・	12・8	10・18	10・15	8・8	7・25	月・日					
細川嘉六の論文掲載の『改造』発禁となる 米軍、ガダルカナル島上陸 ミッドウェー海戦 翼賛政治会創立 米空軍、日本本土初空襲（京浜地方など）											米英映画上映禁止 始 真珠湾奇襲、マレー半島上陸、太平洋戦争開 東条英機内閣成立 ソルゲ事件起こる（尾崎秀実ら捕わる） 文部省、学校報国隊の編成を指令 米英、対日資産凍結				社 会 経 済 状 況			

第4章のための資料

○太平洋貿易研究所

昭和十年末、徳増栄太郎、波辺輝一、岡野鑑記、井上龜三、井上龜三、森田優三、越村信三郎の各教官が組織した研究所員懇談会で、貿易研究所設置の準備として調査報告会などの活動を行ってきたが、昭和十五年に各務財団から、第一年度の研究資金として一万円を提供されたのを機に、同十六年一月二十三日、太平洋貿易研究所が開所された。

第一期事業計画は左記のとおり。

◇東亜共栄圏の一環としての南洋地域に関する産業および貿易

の調査研究

一、資料収集、調査出張

- 一、調査研究、資料の翻訳
一、太平洋産業研究叢書刊行
一、公開講座開設

一、業者その他関係団体との連絡協議
◇研究所職員および研究員

所長 田尻常雄校長
主任 徳増栄太郎教授
副主任 森田優三教授

昭和20年					
8・15	5・29	5・	4・15	4・	3・18
終戦、正午校庭で岡野校長以下玉音放送を聞く	午前から再び横浜大空襲、富士見寮も焼失、学校は本館を残すのみとなる	戦時教育令公布	夜半の横浜大空襲で学校工場（体育館）と木造部分の大部分を焼失	新入生を出身中等学校の勤労動員先で待機させることにした	政府、決戦教育措置要綱を決定 学校の授業を全面停止し、全生徒の勤労動員を実施
8・15	8・9	8・8	7・26	5・7	2・4
日本、ボツダム宣言受諾、終戦の昭勅放送	米軍、長崎に原爆投下	ソ連対日参戦	米軍、広島に原爆投下	ドイツ降伏	ヤルタ会談 米軍、硫黄島上陸 米空軍機、東京大空襲 米軍、沖縄上陸 サンフランシスコで国連創立総会開催

昭和19年						昭和18年	年
9・	9・7	6・	5・	5・	4・	12・24	12・1
本科第十九回卒業式挙行、卒業生一〇四名	式挙行	体育館を学校工場とした「東芝清水ヶ丘工場」の開所	学校に横穴式防空壕の掘きく開始	学徒勤労動員通年制実施	工業経営研究所創立	第二十一回入学式挙行	貿易別科第十五回卒業式挙行、卒業生四九名 戦時学制改革により四月の新入生から「横浜工業経営専門学校」に転換、従来の学校は「横浜経済専門学校」として存続、貿易別科廃止
11・24	11・7	10・25	9・18	7・18	7・10	12・23	11・25
サイパン基地からのB29による本土空襲はじまる	尾崎秀実死刑執行さる	特攻隊出撃	満十八歳以上を兵役に編入と決定	東条内閣総辞職	サイパン島陥落	「中央公論」、「改造」強制廃刊	学童の集団疎開実施を発表（8月4日、東京の三六六年生第一陣出発） 米軍サイパン島上陸、米英軍ノルマンジー上陸 学童の集団疎開実施を発表（8月4日、東京の三六六年生第一陣出発） 朝鮮に徴兵制布く、米軍マーシャル群島上陸 高級料理店、カフェ・バーなど一せい休業、歌舞伎座など全国主要一九劇場、映画館閉鎖（4月1日実施） 米軍サイパン島上陸、米英軍ノルマンジー上陸 マキン・タラワ両島日本軍全滅 第一回学徒兵入隊（学徒出陣） 徴兵年齢十九歳に一年引き下げ

学 科 目	学 年		第一学年毎週教授時数		第二学年毎週教授時数		第三学年毎週教授時数	
	第一学期	第二学期	第一学期	第二学期	第一学期	第二学期	第一学期	第二学期
修 身 及 教 育	一	一	一	一	一	一	一	一
英 語 及 商 業 文	三	三	三	三	三	三	三	三
第 二 外 語	七	七	七	七	七	七	六	六
数 学 及 珠 算	三	三	三	三	三	三		
理 学 及 商 品 学	(商) 二	(商) 二	二	二	二	二		
工 学 及 意 法	二	二	二	二	二	二		
法 学 通 論 及 憲 法	二	二	二	二	二	二		
民 法 及 商 事 関 係 法	二	二	二	二	三	二		
商 法 及 商 事 関 係 法	二	三						
経 済 学 原 理								
経 済 学 政 策								
経 済 地 理 及 外 国 経 済 事 情								
財 政 学								
商 業 營 通 所	一	一	二	二	二	二	一	一
市 場 及 取 引								
文 通								

〔本科学科課程（昭和十五年三月二十二日、文部省令第十二号）〕

改正の要点は、まず教授時数を一週三十二時間と、これまでより二時間縮減したこと、選択科目を廃止し科目を総合主観として、細分化を改め、さらに時局に応じて日本産業論、東亜経済論等を新設したことである。また、第二外国語は第一学年

の第一学期から課して、第三学年の第二学期には随意科目とし、商業史、商業地理はそれぞれ経済史、経済地理と改称した。改訂学科課程表つぎのとおり。

幹 事

越村信三郎教授、井手文雄講師
書記 斎藤照之助主事、野口勝利書記
研究員 岩本啓治、下田礼佐、南郷康博、不二門電観、徳増栄太郎、大竹綾、渡辺輝一、井上龜三、森田優三、黒沢清、沼田嘉穂、越村信三郎各教授、井手文雄講師

昭和十七年度には、引きつづき第二年度の資金として各務財団から二万円の提供を受け、南方地域の産業経済の研究調査を続行した。印刷頒布した資料は左記のとおり。

太平洋産業研究叢書

- 第一輯 關領東印度經濟研究資料Ⅰ（昭和十六年六月二十日発行）
- 第二輯 關領東印度經濟研究資料Ⅱ（昭和十六年六月二十日発行）
- 第三輯 タイ国産業經濟事情（昭和十六年十月七日発行）
- 第四輯 英領馬來の主要産業に就て（昭和十六年十一月十二日発行）
- 第五輯 世界的危局下に於ける關印財政（昭和十七年二月十三日発行）
- 第六輯 東亜共栄圈經濟循環の基本圖式（昭和十七年二月十三日発行）
- 第七輯 仏領印度支那（昭和十八年三月五日発行）
- 第八輯 華僑研究（昭和十七年十二月三十一日発行）

南方共栄圈資料目録

本校図書館、調査部および本研究所所蔵図書、備付資料より南方關係の文献、資料を書き抜き、地域別に分類整理して作成、第三輯まで印刷頒布した。

○『商学』のその後の動向

昭和四年本校内に商学会が創設され、雑誌『商学』が発刊されたことはさきに述べたとおりだが（第二巻のための資料参照）、当初年二回発行だった『商学』は、早くも昭和六年の第四号から年三回発行へ発展、同十三年の第二十六号まで年三回が継続された。しかし、その後用紙代、印刷代の高騰のため年二回発行にもとどることを余儀なくされた。さらに戦時下に入るとともに、用紙手当難も加わって、年二回発行も困難となり、ついに昭和十七年には三十五・三十六号を合冊として年一回の発行となった。

○第二次学科課程改訂

昭和七年四月以降実施されてきた第一次改訂は、専門科目を三年次で選択科目として履修させるものであったため、学生が選択科目ということで履修する風が出てきたこと、また、科目が細分化されていたため、一教官の担当科目が多く負担が重くなっていたことなど、欠陥が明らかになった。そこで、昭和十五年度から学科課程の第二次改訂が実施された。

第4章のための資料

- 第一条 本団ハ横浜高等商業学校報国団ト称ス
- 第二条 本団ハ本団ノ綱領ニ則リ団員一致心身ノ修練ヲ行ヒ校風ノ発揚ヲ図ルヲ以テ目的トス
- 第三条 本団ハ本校職員、生徒ヲ以テ之ヲ組織ス
- 第四条 本団ニ左ノ五部ヲ置ク
- 一、総務部
 - 二、鍛鍊部
 - 三、國防部
 - 四、文化部
 - 五、生活部
- 第五条 総務部ハ企画、指導、総理ニ当リ且他ノ部ニ属セザル事務ヲ掌ル
- 総務部、鍛鍊部、國防部、文化部、生活部ニ次ノ諸班ヲ置ク
- 総務部 東亞研究室
- 鍛鍊部 作業、強歩、体操、陸上競技、水上競技、野球、庭球、卓球、籠球、蹴球、排球、ラグビー、剣道、柔道、弓道
- 國防部 射撃、銃剣術、馬術、滑空、海洋
- 文化部 學報、研究、音楽、文芸、語学
- 生活部 保健、共済、購買
- 第六条 本団ニ左ノ役員ヲ置ク
- 団長 一名

- 副団長 一名
- 部長 若干名
- 班長 若干名
- 理事 若干名
- 幹事 若干名
- 第七条 団長ハ學校長之ニ当ル
- 副団長、部長、班長及ビ理事ハ職員中ヨリ幹事ハ生徒中ヨリ団長之ヲ任免ス
- 第八条 団長ハ本団ヲ処理ス
- 副団長ハ團長ヲ輔佐シ團長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス
- 部長ハ團長ノ指揮ヲ受ケ其ノ部ヲ統括シ部務ヲ掌理ス
- 班長ハ部長ヲ輔佐シ班務ヲ掌ル
- 理事ハ部又ハ班ニ属シ部長又ハ班長ヲ輔佐シ部務又ハ班務ニ參與ス
- 幹事ハ總務部又ハ班ニ属シ部長又ハ班長ノ指揮ヲ受ケ事務ニ従事ス
- 第九条 部長ヲ以テ部長会ヲ組織ス
- 部長会ハ團長之ヲ招集ス
- 部長会ハ團長ノ諮問ニ応ジ予算決算其ノ他重要ナル事項ヲ審議ス
- 第十条 職員タル役員ヲ以テ役員会ヲ組織ス
- 役員会ハ團長之ヲ招集ス

商業分科				貿易分科				経営分科			
學科目	授時數	學科目	授時數	學科目	授時數	學科目	授時數	學科目	授時數	學科目	授時數
配給論	—	國際金融	—	工業經營論	—	配給論	—	國際金融	—	配給論	—
會計監査	—	保險各論	—	組合論	—	金融各論	—	保險各論	—	組合論	—
金融各論	—	文通各論	—	會計監査	—	文通各論	—	會計監査	—	文通各論	—
保險各論	—	世界經濟論	—	原価計算	—	保險各論	—	原価計算	—	保險各論	—
文通各論	—	國民經濟論	—	經濟分析	—	文通各論	—	經濟分析	—	文通各論	—
景氣論	—	國際法	—	社會政策	—	景氣論	—	社會政策	—	景氣論	—
組合論	—	貿易實踐	—	工業各論	—	組合論	—	工業各論	—	組合論	—
商業實踐	—					商業實踐	—			商業實踐	—

三、第一外國語ハ英語トス

第二外國語ハ支那語、馬來語、西班牙語、拉達語及仏國語トシ其ノ一ヲ選択履修セシム

四、特殊學科目ハ生徒ヲ左ノ三分科ニ分チ各分科ニ屬スル學科目ノ中ヨリ學校長ノ指定シ毎週五時間ヲ履修セシム

五、本校ノ外國語學科目トシタイプライティング及活字組立ヲ配スルコトアル

六、商業文ニ於テハ書法ヲ併セ配スルモノトス

七、體育ノ學科目ハ法律、經濟、商業ニ關スルモノニ限ル

なお三分科學科目中履修すべきものはつぎのごとく決定した

(十八年度)

○圖書館の状況

本校の圖書館は、學校の性質上經濟學に關する圖書が圧倒的な割合を占め、その昭和十八年一月現在の蔵書冊数は左記のとおりだった。

和漢書 一三、七一四冊

洋書 九、一八三冊

合計 二二、八九七冊

昭和九年までは洋書數七、四五九冊に對し和漢書七、一七九冊と、洋書のほうが多かったが、その後日中戦争の開始(昭和十二年)以來、強力な為替管理の遂行によつて洋書輸入が窮屈になり、さらに日米開戦(同十六年)に先き立つ独ソ開戦、英米の對日資産凍結によつて、洋書輸入がまったく中絶した結果、和漢書のほうが多くなった。圖書館では、昭和十三年六月下旬と同十六年十二月一日の二度にわたり、在校生徒の読書傾向の調査を行なった。

○学友会解散、學校報國団に組織がえ

準戰時体制に入るとともに昭和十五年十一月三十日、学友会は解散され、學校報國団に組織がえされた。同時に消費組合も報國団の組織中に包含され、生活部購買班となった。報國団団則左記のとおり。

横浜高等商業學校報國団団則

役員会ハ团长ノ諮問ニ応ジ規則ノ変更其ノ他团长ニ於テ重要ト認ムル事項ヲ審議ス

第十一条 本団ノ経費ハ団費及入団金ヲ以テ之ヲ支弁ス職員員員ハ団費トシテ俸給ノ二百分ノ一ヲ贈出ス

生徒団員ノ団費ハ年額金拾五円トシ四月ニ拾円九月ニ五円ヲ授業料ト同時ニ納付スルモノトス 但特別ノ理由アルトキハ臨時団費ヲ納付スルコトアルベシ

入団金ハ本科生徒金五円貿易別科生徒金貳円トシ入学ノ初メニ納付スルモノトス

本団ハ寄附金及入団金ヲ以テ本団ノ基金トスルコトヲ得

第十二条 本団ノ会計年度ハ毎年四月ニ始マリ翌年三月ニ終ル

第十三条 团长ハ部又ハ班ニ部則又ハ班則ヲ定メシムルコトアルベシ

第十四条 团长ハ他校若クハ他ノ団体ト連合シ又ハ之ト對抗スル研究競技其ノ他ノ会合ニ団員ノ参加ヲ命ズルコトアルベシ

他ノ主催スル会合ニ対シテモ亦同ジ

附則

第十五条 本規則ハ昭和十五年十二月一日ヨリ之ヲ実施ス

横浜高等商業学校報國團綱領

一、団員ハ団体ノ本義ニ遵微シ文ヲ修メ武ヲ練リ質実剛健ノ氣風ヲ振勵シ尽忠報國ノ信念ヲ涵養スベシ
一、団員ハ礼儀ヲ正シ氣節ヲ尚ヒ廉耻ヲ重ンジ誠敬奉公ノ精神ヲ振作スベシ
一、団員ハ強健ナル身体旺盛ナル氣力鞏固ナル意志ヲ養成シ學問ノ理想實現ニ邁進スベシ

報國団役員（十五年十一月三十日付）

团长 田尻校長
副团长 岩本教授
総務部長 下田教授
鍛鍊部長 小幡教授

作業班長 不二門教授
強歩班長 河村教授
体操班長 下津屋教授
陸上競技班長 同
水上競技班長 井手講師
野球班長 小幡教授
庭球班長 渡辺教授
卓球班長 時田教授
蹴球班長 富成教授
籠球班長 伊東教授
剣道班長 小幡講師
柔道班長 大竹教授

国防部長

不二門教授

弓道班長 光井教授

射撃班長 小白講師

銃剣術班長 同

馬術班長 下津屋教授

滑空班長 不二門教授

文化部長

徳増教授

学報班長 森田教授

研究班長 徳増教授

語学班長 西村教授

文芸班長 井上教授

音楽班長 沼田教授

生活部長

黒沢生徒主事

保健班長 黒沢生徒主事

共済班長 南郷教授

購買班長 越村教授

○報國団の編成

時局の緊迫化とともに、文部省は、学校報國団の組織を指揮系統の明確化した軍隊式のものに編成するため、昭和十六年八月八日、学校報國団の編成を直轄学校長、公私立大学専門学校長に訓令、これにもとづき本校も、同年九月六日学校報國団を結成した。

各組を小隊とし、三年、二年、一年と貿易別科をもって、それぞれ第一、第二、第三中隊とし、全校をもって一個大隊を編成、総隊長は田尻校長、大隊長は岩本教授が当たり、各中、小隊長も教授がこれに当たった。

横浜高等商業学校報國団規則

第一条 横浜高等商業学校報國団ノ強化ヲ計リ指揮系統ヲ確立シ時局ニ挺身奉公スルヲ報國団ヲ設ク

第二条 本報國団ハ横浜高等商業学校報國団ト稱ス

第三条 本報國団ハ本校報國団員ヲ以テ組織ス

第四条 本報國団ハ本隊特技隊特別警備隊トス

本隊ハ報國団全員ヲ以テ組織ス

特技隊ハ特殊ノ技能アル者ヲ以テ組織シ自転車隊消防

隊トス

特別警備隊ハ非常災害時ニ於ケル特別警備其ノ他ノ任

ニ当リ得ル者ヲ以テ組織ス

第五条 報國隊長ハ本校報國団員之ニ當リ全部隊ヲ統轄ス

第六条 本報國団ニ本部ヲ設ケ部附ヲ置ク

部附ハ教職員中ヨリ隊長之ヲ命ズ

第七条 本隊ニ一個大隊ヲ置キ大隊ハ三個中隊中隊ハ第一、

第二中隊四個小隊第三中隊五個小隊小隊ハ四個分隊編成

トス

特技隊ニ自転車隊一個小隊消防隊一個小隊ヲ置キ小隊

ハ二個分隊編成トス

○開校二十周年当時（昭和十八年五月）の概況

特別警備隊二個中隊ヲ置キ中隊ハ三個小隊小隊ハ第一第二小隊四個分隊第三小隊五個分隊編成トス

第八條 大隊中隊小隊分隊ニ各長ヲ置ク

小隊長以上ハ教職員中ヨリ分隊長ハ生徒中ヨリ隊長之ヲ命ズ

第九條 小隊以上ニ隊附ヲ置クコトヲ得

生徒中ヨリ隊長之ヲ命ズ

第十條 以上ノ外必要ナル事項ハ其ノ都度隊長之ヲ定ム

第十一條 本報國隊編成ノ細部ハ附表ニ依ル

（付表略）

一、職員

校長

田尻 常雄

教授

經濟地理、南米及南洋經濟事情、東亞經濟

下田 礼佐

英語

西村 桐

商品學、商品実験、工業概論、物理化學、

南植 廣博

演習

不二門電報

法學通論及憲法、民法、商法、演習

光井武八郎

商業英語、商業通商、英語

河村重治郎

英語

（兼）

下田 礼佐

（兼）

不二門電報

生徒指導

黒沢 清

（渡辺、越村兩教授不在中、經濟政策ハ井手教授、經濟原

論ハ森田教授、經濟大意ハ徳増教授担当）

經濟原論、經濟大意、演習（経済學研究所入所中）

越村信三郎

商業概論、銀行概論、演習

沼田 嘉雄

經濟政策、貿易大意、演習

井手 文雄

英語

沢崎九二三

經濟史、日本産業論、演習

徳増栄太郎

仏國語

時田 清

英語

伊東 弥

商法、國際法、演習

大竹 緑

經濟政策、演習（南方出張中）

渡辺 輝一

數學

小橋 孫二

經營經濟學、商業概論、配給論、演習

井上 龜三

金融論、統計學、外國為替、演習

森田 健三

簿記及簿籍組織、會計監査、原価計算、經

下津屋俊夫

體操

黒沢 清

修身

宮成喜馬平

配屬將校

教練

陸軍大佐 藤堂 大輔

助教授

岡田 峻

西班牙語

神子田 茂

独逸語

岡本 隆三

支那語

信永 清

馬來語

（在召中）

講師

職員

珠算

陸軍大尉 小白 寛

農業大意及農業經營、農業實習及測量

山崎与右衛門

國語及漢文、商業文、國史

井上憲司郎

英語、外國英語

石島 快隆

保險論、交通論

岸登 烈

外國人講師

相馬 勝夫

西班牙語

ホセ・エレロス

英語

ルードウィヒ・エー・フランク

書記

主事 斎藤照之助

書記

校医

書記

校医

書記

事務分掌

書記

主任 教授 下田 礼佐

書記

主任 教授 下田 礼佐

第4章のための資料

卒業年度	卒業年月	官吏	教員	銀行または 会社員	新聞記者	個人 店員	自営業者	兵役	学生または 研究者	留学生	死亡した者	不詳	計
第一回	昭和二・三	五	六	七〇	一	五	六	二	一三	一	二	七	一一七
第二回	昭和三・三	二	三	九四	一	四	六	一五	九	一	一	六	一三〇
第三回	昭和四・三	一	四	八七	一	九	六	一	一五	一	一	六	一三一
第四回	昭和五・三	一	四	九四	一	九	六	一	一五	一	一	六	一三三
第五回	昭和六・三	一	三	八四	一	八	七	一	一五	一	一	七	一四四
第六回	昭和七・三	一	三	七七	一	八	七	一	一五	一	一	七	一四四
第七回	昭和八・三	一	三	一〇三	一	八	七	一	一五	一	一	七	一四四
第八回	昭和九・三	一	一	一〇九	一	八	七	一	一五	一	一	七	一四四
第九回	昭和十・三	一	一	二〇六	一	八	七	一	一五	一	一	七	一四四
第十回	昭和十一・三	一	一	二一〇	一	八	七	一	一五	一	一	七	一四四

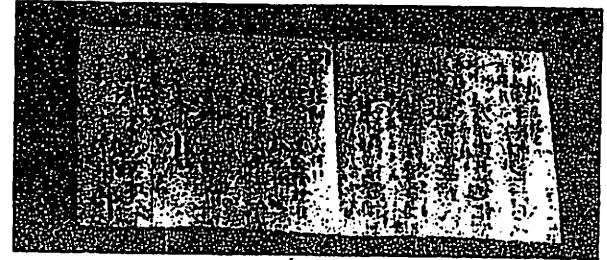
○卒業一年後における卒業生の状況

募集年次	種別			種別		
	中学	商業	計	中学	商業	計
昭和十三年度	九二一	四五九	一三八〇	一三三	六六	一七九
昭和十四年度	八二三	四八六	一三〇九	一〇〇	六七	一六七
昭和十五年度	八〇九	六二四	一四三三	七九	九三	一七二
昭和十六年度	四七五	四六七	九四二	九二	二二三	二二三
昭和十七年度	三八五	三七六	七六一	八二	二二六	二〇七
昭和十八年度	一〇三六	五〇七	一五四三			二〇〇

○本科入学志願者・入学者累年比較表

募集年次	種別			入学志願者			入学者		
	中学	商業	計	中学	商業	計			
昭和十三年度	八四	三三	一一七	三三	一六	四九			
昭和十四年度	八〇	三七	一一七	三三	一七	五一			
昭和十五年度	七四	三五	一〇九	三三	一六	四九			
昭和十六年度	四七	五一	九八	二二	一六	三八			
昭和十七年度	七〇	六四	一三四	一八	三二	五〇			
昭和十八年度	七八	一四二	二二〇	一三	四一	五四			

○貿易科入学志願者・入学者累年比較表



新入生諸君！

無敵皇軍の武威の下、今や我等の活躍舞台は赤道越えて至る所に開かれた。此時に当り、身体の強健は絶対に要請される。而も諸君は遠からず統を取り戦に馳せ向はねばならない体である。諸君！ 輝やかしき横浜商入學に当り咲き乱れる桜花の下、諸君は栄冠の美酒に酔ひ最も有意義なる三ヶ年のカレッジライフを求めてやまぬ事と思ふ。諸君！ 『部生活無きカレッジライフは、気の抜けたビールの如し』

最も強靱なる肉体！

最も健全なる運動精神！

最も明朗なる部生活！

あらう。

経験の有無は問題ではない、

初心者殊に大歓迎！ いざ来れ！

気高き富士を仰ぎつゝ、共に緑のグラウンドに戯へむ！

十七年四月一日

蹴球部

試合した相手は高工との定期戦のほか、関東学院高商部、大倉高商、慈恵院大予科、慶応OD（オールド・ドンキークラブ）、セントジョセフ・カレッジ、東商大専門部など。その後物資不足がひどくなり、十八年には文部省が学校間の対抗試合を禁止するに及んで、蹴球部もただボールと靴を大事に使いながら、もっぱら放課後の練習に専念するようになっていった（高商十七回小瀬行則、同十九回岡村香雄両氏のメモによる）。



部室にて

富士見寮歌

港入江の春告げて

昭和16年8月作

作詩 深沢克己

作曲 望月 誠

♩ = 52 ~ 56

mp *mf*

みなといりえのはるつけて つどえるわれら このせいち
あわれこんとんよのすがた ほくどこよいも みえわかず

mp *mf*

おかにふよ—の なをおいつ まなびのまどに— はなのさき
ひかりはながく— やみにきえ われらがぐし— やまざくら

mp *f*

はなまたちりてしゅんじゅうの うつ—りはここに— じゅうよねん
ちりてはかなきじんせいの たど—るゆくえは— いまいずこ

三 この世を永久に満月の
まろけきものと只管に
思い馳れる宮人の
鎧の袖の一ゆれに
打ち滅ばせし鎌倉の
武士こそ我等が姿なれ

二 あわれ涙頓世の姿
北斗今宵も見え分かず
光は永く闇に消え
我等が具像山桜
散りてはかなき人世の
たどる行方は今いずこ

港入江の春告げて
集へる我等この聖地
丘に芙蓉の名を負いつ
学びの窓に花の咲き
花また散りて春秋の
移りはここに十余年

班 備考 第十六回宴会歌にて一八と記入されているのは当時の国家的特殊事情によるもの。

第 十七 回	第 十六 回	第 十五 回	第 十四 回	第 十三 回	第 十二 回	第 十一 回
十七 九	十六 十二 三	十六 三	十五 三	十四 三	十三 三	十二 三
一	一八	一	一	一	一	二
一	一	一	一	一	一	一
一五 八	一二 二	一二 七	一三 四	一三 八	一三 三	一四 六
						一
四	二	三	四	五	三	二
						一
一四	〇	三	八	四	九	八
						一
			一	三	一	一
一七 八	一五 二	一六 九	一六 〇	一五 八	一五 七	一六 三

追 送 歌

富士見ヶ丘にこもりては

昭和16年8月作

作詩 山田 博

作曲 望月 誠

$\text{♩} = 40$

mp *mf*

ふじみが おかに こもりて は — ばんだの
うちては よせる うなばら を — しこのか

かおり むしのね や — すぎてぞ あきの
なたに みおろし て — ぶんかの はなを

mp

よはのつ き — そのうる わしの あとかた
たおると き — わかきい のちの ひはもえ

mf

ぞ — したいて ぞ こそ かたるら め —
て — ゆめひろ が りぬ はてしな く —

- | | | | | |
|--|--|---|--|---|
| 五 | 四 | 三 | 二 | 一 |
| 富士見ヶ丘に集い来し
若き心よ人の世の
怒れる海に乗り出でん
通う情に蘇り
理想の血潮たぎらせん | 夜空に高く輝やける
星影さやか杯くみて
酒に酔いつつ睡らえば
行方も知れずただよえる
小船に探き憂いあり | 嵐のさ中極高く
常盤の木立揺るとも
白雷の轟轟々と
不変の道を歩み行く
雄々しき姿君見すや | 打ちては寄せる海原を
指呼の彼方に見下して
文化の花を手折る時
若き命の火は燃えて
夢がかりぬ果てしなく | 富士見ヶ丘に籠りては
萬葉の香り虫の音や
過ぎてぞ秋の夜半の月
その隠しの跡方を
慕いてぞこそ贈るらめ |